

4. 平城京跡（左京二条四坊一坪）の調査 第447次

調査次数	HJ 第447次	調査期間	平成12年5月23日～7月27日
事業名	仮称佐保川保育園建設事業	調査面積	650m ²
届出者名	奈良市長	調査担当者	宮崎正裕
調査地	法蓮町393、395-2		

調査地は、平城京の条坊復原では、左京二条四坊一坪の南半中央に位置する。過去に調査地の南で一・二坪境小路を検出している（市第157次調査・昭和63年度、市第238次調査・平成3年度）。

基本層序は、造成土、耕土以下、淡茶灰色粘砂、淡茶灰色粘質土と続き、地表下約0.8m（標高64.8m前後）で黄色粘質土の地山に至る。発掘区南半の地山上面で河川を検出した。遺構の存する面は、地山あるいは河川埋土上面である。

主な遺構には、奈良時代及び平安時代前半の掘立柱建物・塀、井戸、暗渠、溝、土坑と鎌倉時代の上坑がある。

SB01は、建物の南側柱列の東端で、東西1間（3.0m）分を検出した。

SB02は、東西4間（10.8m）以上の建物の南側柱列で、柱間は2.7m（9尺）等間である。

SB03は、東西棟建物で、桁行1間（2.4m）分、梁間2間（3.6m）を検出した。柱間は、梁間が1.8m（6尺）等間である。重複関係から後述のSA09より新しい。

SB04は、梁間3間（6.9m）の南廂付東西棟建物の東妻側柱列にあたる。柱間は、身舎が2.1m（7尺）等間、廂が2.7m（9尺）である。重複関係から後述のSB07より新しい。柱穴から8世紀末～9世紀初頭の須恵器、黒色土器A類が出土した。

SB05は、北廂付東西棟建物で、桁行1間（2.4m）分、梁間3間（7.5m）を検出した。身舎の柱間が2.2m、廂の出が3.1mである。重複関係から後述のSK17より新しい。柱抜き取り坑から9世紀の土師器、須恵器が出土した。

SB06は、南北3間（5.4m）、東西3間（4.5m）の総柱建物である。柱間は、南北が1.8m（6尺）、東西が1.5m（5尺）等間である。重複関係から後



発掘区位置図 1/6,000



発掘区全景（東から）



発掘区全景（北から）

述のSB07より新しい。柱穴から9世紀の土師器・須恵器と、転用硯、櫛羽口が出土した。

SB07は、桁行6間（14.4m）、梁間2間（4.8m）の東西棟建物である。中央を間仕切り、建物を東西に2分する。柱間はすべて2.4m（6尺）等間である。重複関係から後述のSD15、SK20より古い。

SA08は、東西5間（10.5m）以上の堀で、柱間は2.1m（7尺）等間である。柱穴から8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器、黒色土器A類が出土した。

SA09・10は、ともに東西堀で、1間（2.4m）分を検出した。

SA11は、東西6間（11.1m）以上の堀。柱間は不揃いである。東端で後述のSA12北端と繋がる。重複関係から後述のSK20より古い。柱穴から8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器が出土した。

SA12は、南北堀で、1間（1.8m）分を検出した。

SE13の掘形は、南北3.5m、東西4.0mの平面椿円形で、深さ2.2mである。枠は、大部分が抜き取られるが、最下段の井桁状に組まれた横板が残っていた。枠の内法は一辺0.9mで、横板の両端には、隅柱を差し込む穴がある。掘形底から0.6mまでは、砂と粘土で埋めている。その上に礫を0.2mの厚さで敷き、その上に枠材を据えている。

枠抜き取り坑から8世紀中頃～後半の土師器、須恵器、黒色土器A類と、軒平瓦6681型式A種が1点、丸瓦、平瓦、転用硯が出土した。

SX14は、木樋を使用した東西方向の暗渠である。東西1.8m、南北0.4m、深さ0.2mの掘形の底に枕木を3点置き、その上に溝状に削り抜いた木材を被せている。頂部の大部分が腐食している。暗渠内から8世紀～9世紀初頭の土師器、須恵器、漆付着土器と、丸瓦が出土した。

SD15は、幅0.3～0.5m、深さ0.2mの東西方向の溝である。西端で後述のSD16に繋がる。8世紀の土師器、須恵器と、平瓦が出土した。

SD16は、幅0.3m、深さ0.1mの南北方向の溝で、北でやや東に振れる。長さ2m分を検出した。南端はSX14に繋がっていた可能性がある。

SK17は、東西7.5m、南北3.5mの土坑で、発掘区外東へ続く。掘形は船底状で、発掘区東端で

の深さは0.8mである。8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器と、丸瓦、平瓦が出土した。

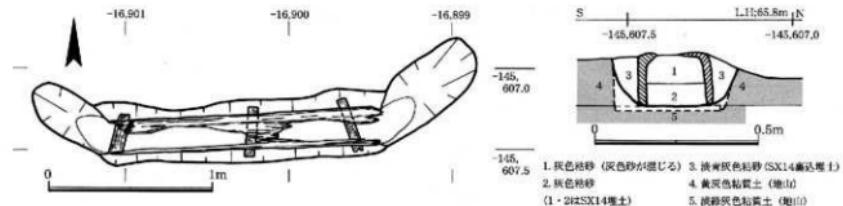
SK18は、南北1.8m、東西1.2m、深さ0.2mの土坑である。重複関係から後述のSK19より古い。8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器、製塙土器と、丸瓦、平瓦が出土した。

SK19は、南北1.5m、東西2.5m、深さ0.5mの土坑である。

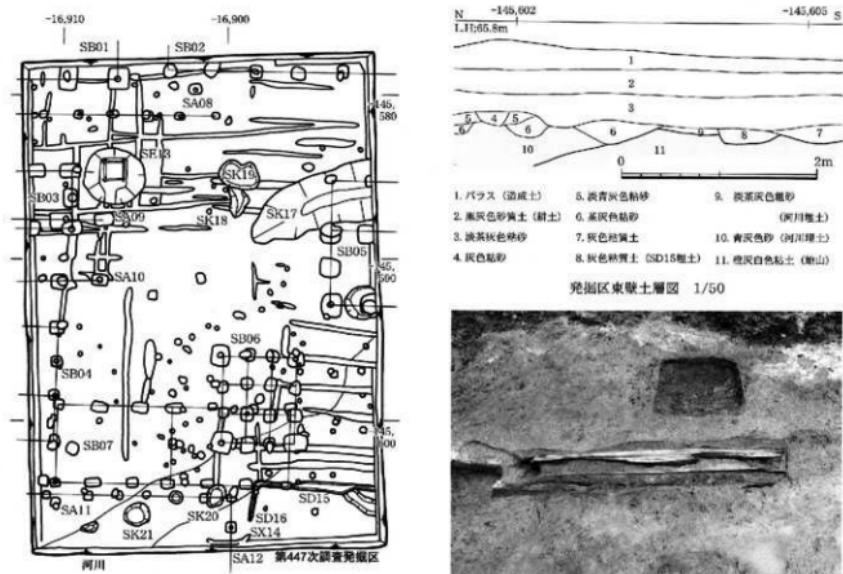
SK20・21は、鎌倉時代の上坑である。SK20は、直徑1.2m前後の不整円形で、深さ0.3mである。SK21は、直徑1.3m前後の不整円形で、深さ0.2mである。いずれからも8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器、13世紀の瓦器と、丸瓦、平瓦が出土した。

川土遺物は、整理箱で上器8箱、瓦7箱の計15箱分ある。土器は、大半が8世紀のものである。瓦は、奈良時代の軒平瓦2点、磚1点のほか、破片を含めて、丸瓦が262点（18.930kg）、平瓦が513点（45.785kg）、いずれか不明なものが257点（2.575kg）の計1,032点（67.290kg）がある。上器、瓦とともに発掘面積に対して出土量が少ない。

最後に主な遺構の変遷をまとめめる。調査地の南で実施した第157次調査では、SA05・SB10が一・二坪坪境小路（SF01）に先行することから、奈良時代前半に少なくとも一・二坪の2坪を利用した大規模な宅地を想定している（A期）。とすれば、今回検出した遺構にもA期に相当するものがあるはずである。変遷の考え方やすい発掘区南半の遺構は、重複関係、配置、遺物から、①SB07→②SB04・06、SA11・12、SX14、SD15・16→③SK20・21の変遷が考えられる。この変遷を第157次調査で想定した時期区分に対応させれば、最も古く位置付けたSB07が、第157次調査のSA05・SB10と併存すると考えられ、一・二坪の2坪を利用した大規模な宅地の時期（A期）の遺構である可能性が高い。また、発掘区外南へ続くSA12は、坪境小路（SF01）が施工される時期（B期）以降のものになる。仮にB期のものであれば、SF01との位置関係から、南北2間までにとどまる。そして、SA11は、SA12とともに一坪の南辺の一部を区画していた堀の可能性がある。（宮崎正裕）



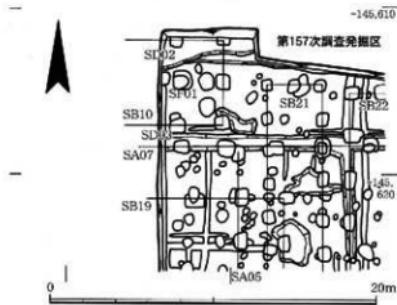
解剖SX14平面図 1/30、断面土層図 (Y=-16,900ライン) 1/15



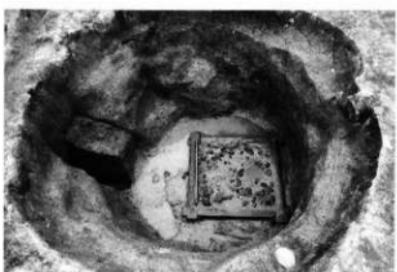
発掘区東壁土層図 1/50



解剖SX14全景 (南から)



造構平面図 1/300



井戸SE13全景 (東から)

5. 平城京跡（左京二条五坊五・十二坪）の調査 第444・448・456次

遺跡名	調査次数	事業名	届出者	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京跡 左京二条五坊五坪	HU444	仮称地区施設建設事業	奈良市長	畠中町15、16、18 19-1、船橋町22~24	平成12.4.26 ~5.24	101m ²	安井宣也
平城京跡 左京二条五坊五坪・十二坪	HU448	畠中小規模住宅地区改良事業		畠中町4-1、-2、ほか 船橋町15-4、ほか	平成12.6.20 ~8.12	500m ²	
平城京跡 左京二条五坊五坪・十二坪	HU456	第3号(桜町)市営住宅 施設事業		法蓮町56-5	平成12.9.18 ~9.25	113m ²	



第444次調査 東発掘区全景（西から）



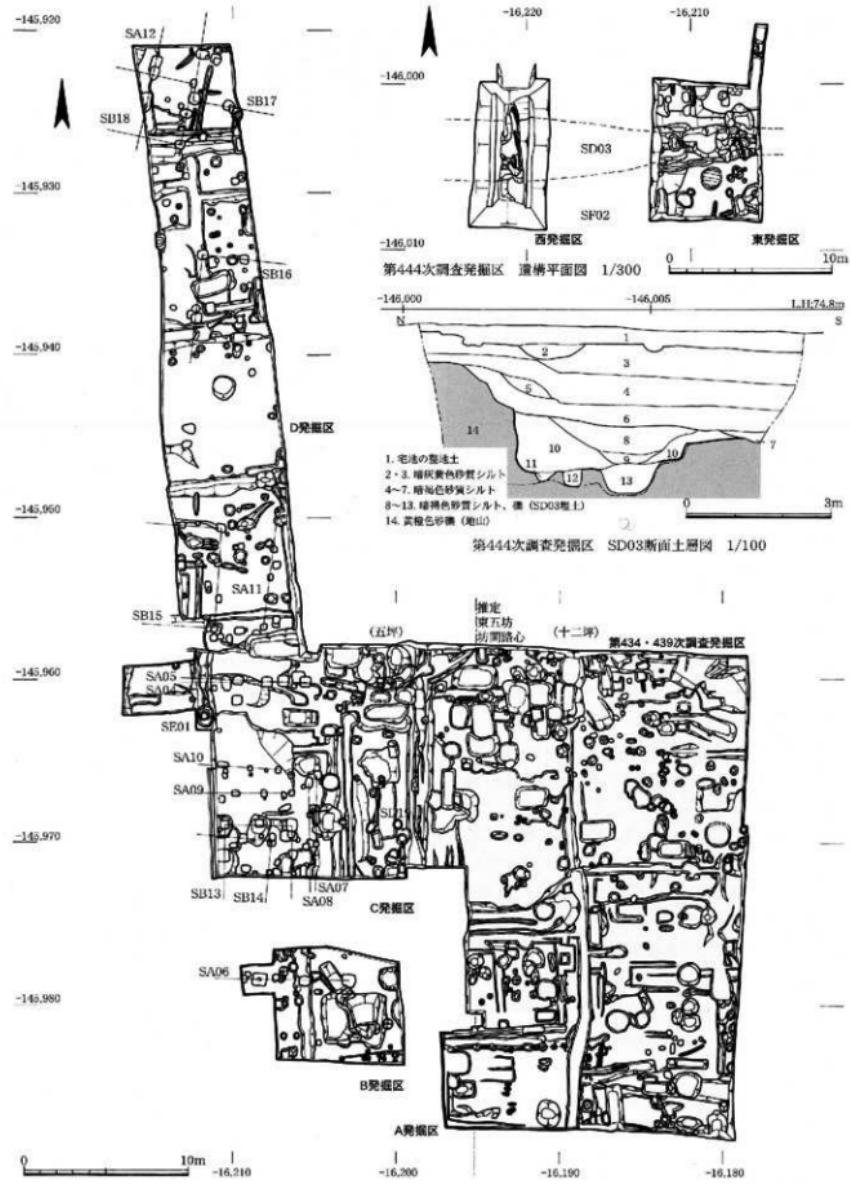
第444次調査 西発掘区全景（北西から）

旧市街地がある段丘の西縁部に位置する畠中町は、平城京の条坊復原では、左京二条五坊五・十二坪にあたり、江戸時代には奈良町の西端部と認識された「畠中村」があった地域である。ここでは、奈良市が進める畠中小規模住宅地区改良事業に伴い、当市教育委員会が平成11年度から平成12年度にかけて、主に改良住宅予定地で発掘調査を行った。平成11年度は、改良住宅予定地の東半部を主に第434次・第439次調査を実施した。平成12年度は、改良住宅予定地南側の地区施設予定地で第444次調査を、改良住宅予定地西半部で第448次調査を実施し、事業地内での発掘調査を完了した。ここでは、この2件の調査に加え、畠中町のすぐ西に隣接する法蓮町内で、奈良市が進める第3号（桜町）市営住宅建替事業に伴い実施した第456次調査についても、同じ五坪内の調査であることから、ここで報告する。なお、遺構番号は昨年度の追番とし、発掘区に關係なく、通し番号とする。

第444次調査 五坪の南を画する二条大路の確認を目的とし、東西2箇所の発掘区を設定し、実施した。

発掘区内の層序は、宅地に伴う整地土（厚さ0.1～1m）の下に中近世の畠地に伴う暗褐色砂質シルトの整地土（厚さ0.2～1.6m）が1～3層あり、段丘堆積層あるいは大阪層群である黄橙色のシルトや砂礫の地山に至る。地山上面の標高は73.7～75.3mで、西発掘区では西落ちの急崖がみられる。地山上面は奈良時代の、暗褐色砂質シルトの整地層のうち、最下層の上面は鎌倉時代の、最上層の上面は江戸時代の遺構が存する面で、鎌倉時代の遺構面上には遺物包含層がみられる。

主な検出遺構は、奈良時代の二条大路（路面・





第448次調査 B発掘区全景（東から）



第448次調査 C発掘区全景（北から）



第448次調査 D発掘区全景（北から）



第448次調査 D発掘区全景（南から）

北側溝）と柱穴で、他に近世畠中村に関連するとみられる江戸時代後半のいくつかの土坑がある。

二条大路は、段丘平坦面を掘り下げて切通し状に造られている。路面SF02は、東から西へ下り、その標高は、東発掘区で73.8～74.7m、西発掘区で71.4mである。同北側溝SD03は、路面からの深さが0.6～0.8mで、幅は、東発掘区で1.4～1.6m、西発掘区で3.5mである。底面は、流水による浸食が著しい。埋土は、褐色系の砂や礫が混じるシルトで、土器・瓦片を含む。溝心の座標は、 $X=-146,004.00$ 、 $Y=-16,211.10$ である。

東発掘区のSD03北側にある柱穴は、二条大路に面して建てられた掘立柱塗の一部とみられる。

主な出土遺物には、奈良時代の二条大路北側溝SD03から出土した8・9世紀の須恵器、土師器、黒色土器A類、軒平瓦（6681型式B種）、丸瓦、平瓦、鎌倉時代の遺物包含層や整地土層から出土した12世紀後半の須恵器、土師器、瓦器、青磁、白磁、軒平瓦、丸瓦、平瓦、江戸時代の土坑から出土した18世紀後半～19世紀の土師器、瓦質土器、

国産陶磁器、丸瓦、平瓦、棟瓦などがある。

第448次調査 五坪東辺部と十二坪西辺部の様相の確認を主目的とし、A～Dの4つの発掘区を設定して実施した。

調査地内の層序は、基本的には宅地の整地土（厚さ0.1m）の下が黄褐色のシルトあるいは砂疊の地山となるが、C発掘区西半とD発掘区北辺では、整地土と地山の間に、畑地の整地土である暗褐色砂質シルト（厚さ0.2m）がみられる。また、C発掘区西半の暗褐色砂質シルトは、奈良・平安時代の遺物を含む。奈良・平安時代の遺構が存する面は、地山上面（標高は74.7～75.6m）である。

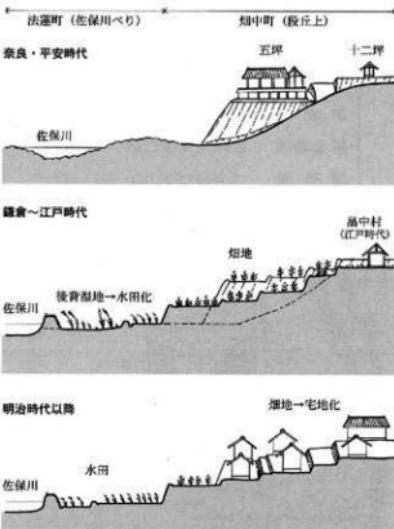
主な検出遺構は、奈良及び平安時代前半の掘立柱列6条（SA06～12）、掘立柱建物6棟（SB13～18）、溝1条（SD19）と、それよりも時期の下る素掘り溝がある。加えて、第434次調査で確認した掘立柱群が2条の東西柱列（SA04・05）となることがわかった。掘立柱列・建物は、重複関係から少なくとも3時期以上の変遷が認められる。D発掘区北半では、柱筋が北に対しやや東に振れるが、



第456次調査地全貌（北西から）



第456次調査 北西試掘坑（北から）



調査地の景観の変遷模式図

地形の制約によるものと考えられる。

掘立柱列のSA06・11・12は、建物の一部の可能性があるが、残りは塀とみられる。

SA04・05は、第444次調査で検出した二条大路北側溝SD03の溝心から北へ約44mの位置にあり、五坪内の南北3等分線上に建てられたものと判断される。なお、B・C発掘区の掘立柱列・建物の分布から、五坪とその東隣の十二坪を画する東五坊坊間路が存在したことが推察され、南北溝SD19は、その推定心から約5m西にあることから、西側溝か雨落溝の一部とみられる。

主な出土遺物は、柱穴・井戸SE01・溝SD19の埋土と整地土から出土した奈良及び平安時代前半（8・9世紀）の須恵器、土師器、黒色土器A類、軒丸瓦（6225型式C種、6225型式種別不明）、軒平瓦、丸瓦、平瓦である。

第456次調査 調査地は、平城京の条坊復原では、五坪の北辺中央部で、もとは近くを流れる佐保川の旧河道の名残をとどめた水田であった。したがって、奈良時代造構面の有無の確認を主目的

として、建物予定地に4箇所の試掘坑を設定し、調査を実施した。層序は、各試掘坑とも、上から造成盛土（厚さ1m）、耕土（厚さ0.2m）の下に中・近世の土器片を含む後背湿地の泥土（厚さ0.3～0.6m）があり、奈良時代の土器・瓦片等を含む旧河道の砂礫となる。砂礫上面の標高は、68.2～68.7mである。奈良時代には佐保川の河道であった可能性が高い。

まとめ 今回の一連の発掘調査では、奈良時代の平城京に関する知見と、以後の土地条件の変遷を把握する手がかりとなる知見を得ることができた。段丘上の畠中町内では、奈良時代に平城京造営に伴う開発が及んで宅地となり、その後、中・近世を通じて広く畠地となり、明治時代以降、次第に宅地化したことがわかった。江戸時代の畠中村の範囲は、遺構の分布から改良住宅予定地の南側でおさまるようである。佐保川沿いの法蓮町内では、奈良時代には佐保川が流れているが、その後、河道が移動して後背湿地となり、江戸時代以降に水田化したようである。
（安井宣也）

6. 平城京跡（右京七条一坊十五坪）の調査 第455次

調査次数	HJ 第455次	調査期間	平成12年8月23日～9月14日
事業名	病院増築	調査面積	198m ²
届出者名	医療法人康仁会	調査担当者	武田和哉
調査地	六条町102-1の一部、ほか		



調査地は、平城京の条坊復原では、右京七条一坊十五坪の西辺中央からやや北寄りで、薬師寺の東方約0.5kmに位置している。

調査地の南や南東では過去に調査事例が3件あり（市HJ第97・349・427次調査）、奈良時代、平安時代、室町時代の遺構が検出されている。今回の調査では、隣接地で検出している遺構の広がりの把握などを目的として、東西約23m、南北約7mの発掘区を設けた。

発掘区内の基本層序は、造成土以下、黒褐色粘土（耕土）、暗灰色土（床土）、灰褐色土（遺物包含層）、暗褐色砂質土または灰褐色砂質土、暗灰色砂質土とつづき、地表下約1.2～1.4mで黄灰色粘砂に至る。遺構の存する面は、暗灰色砂質土または灰褐色砂質土の上面で、地表面から約1.1m、標高は約57.8mである。

検出遺構は、平安時代後期および鎌倉時代の井戸各1基、時期不明の土坑、柱穴、溝である。

SE01は、発掘区中央南寄りで検出した井戸である。掘形は隅丸方形を呈し、東西約2.7m、南北約2.5m、深さは約2.0mである。枠は、方形縦板組

隅柱横桟留の構造で、一辺約0.9mである。枠内から平安時代後半（11世紀前半）の土器が出土した。

SE02は、発掘区東側で検出した井戸である。掘形は隅丸方形を呈し、北辺の一部は発掘区外へと続く。東西約2.5mで、南北約2.0m分を検出した。深さは約2.0mである。枠は、一辺約1.0mの方形縦板組横桟留の構造である。隅柱がなかったために内側に崩壊した状態で検出した。枠材は遺棄されて埋められたと推定される。枠内から12・13世紀頃の瓦器等が出土した。

SK03は、発掘区西側で検出した土坑である。東西約5.3m、南北約2.3m、深さ約0.4mの規模である。埋土から土器や瓦の破片が少量出土したが、時期は不明である。

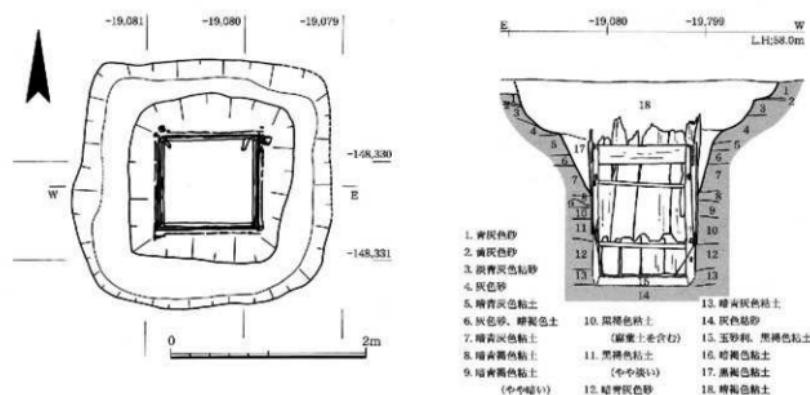
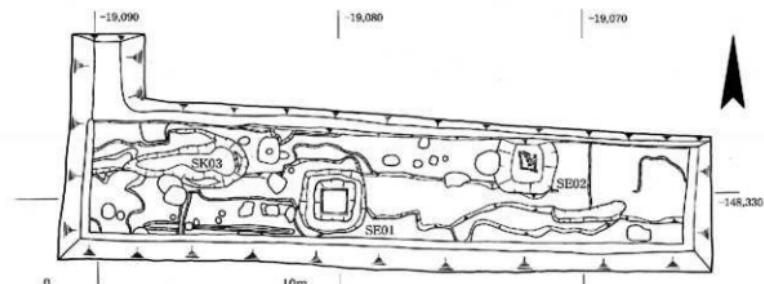
このほか、発掘区中央から西で、柱穴をいくつか検出ましたが、明確に建物としてはまとまるものではなく、時期も不明である。

今回の調査では、平安時代後期および鎌倉時代の遺構を検出したが、奈良時代の遺構は検出されなかった。周辺のこれまでの調査でも、奈良時代の遺構に加えて、長岡京遷都後の時期の遺構もいくつか見つかっており、このことから平城京廃絶以後も、当坪内では何らかの土地利用がなされていたことがうかがわれる。（武田和哉）

出土遺物は、遺物整理箱約13箱分が出土した。うち、土器が約4箱、瓦が約9箱である。

SE01出土土器には、平安時代後半の土師器、黒色土器、白色土器、白磁と、奈良・平安時代前半の土師器、須恵器、灰釉陶器等がある。以下、平安時代後半の土器について述べる。

土師器皿には、口径が9.4～10.8cmの小皿（1～10）と13.5～14.9cmの大皿（13～15）とがある。小皿は、すべて端部を上方につまみだすいわゆる



発掘区全景（東から）



井戸SE01全景（南から）



井戸SE02全景（北から）

「て」字状口縁のもので、大皿には端部を外反させるもの（15）がある。土師器甕（27~29）と羽釜（30・31）は器壁が厚く、さらに口縁端部の内側への折り返しのシャープさも失われている。いずれも体部を無紋のタタキ成形し、28のみ外面を粗いハケ調整する。

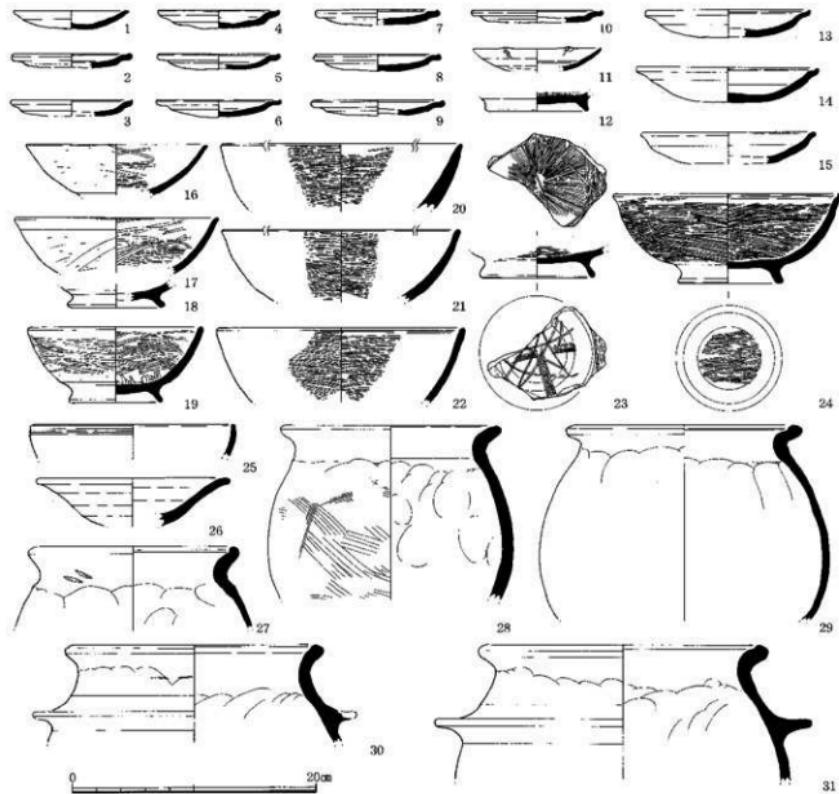
黒色土器柄には、A類（16~19）とB類（12・20~25）とがあり、破片点数ではA類柄が最も多い。23の高台内は十字にミガキ調整し、さらに焼成後「×」を数回重ねるように線刻している。

26は白色土器の皿で、内外面ロクロナデ調整である。

白磁皿（11）は、口縁部の数箇所を内側に押し出して輪花口縁とし、内外面に薄い透明釉をかける。大宰府分類¹¹のXI類で、奈良県内での類例は非常に少ない。

これらの土器は、市HJ第424次調査（平成11年度）で検出したSK05出土の土器に比べて新しい様相があり、平安時代後半（11世紀前半）のものと考えられる。
（中島和彦）

1) 山本信大他『大宰府条坊跡VI－陶磁器分類図』太宰府市教育委員会 2000。



井戸SF01出土土器 1/4

7. 平城京跡（左京四条一坊九坪）の調査 第450・453次

調査次数	HJ 第450次・第453次	調査期間	第450次 平成12年7月10日～7月29日
事業名	第450次 講堂建設 第453次 廉裏建設		第453次 平成12年8月10日～8月31日
届出者名	宗教法人觀音庵	調査面積	第450次 200m ² 第453次 180m ²
調査地	四条大路2丁目832-1, 834-1	調査担当者	秋山成人

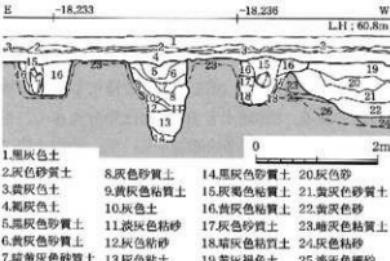
調査地は、平城京条坊復原では、左京四条一坊九坪中央南寄りに位置する。坪内の様相を明らかにするために、北に第450次の、南に第453次の発掘区（その間約31m）を設定し、調査を実施した。

発掘区の層序は、いずれの発掘区も、上から黒灰色土（耕土）、灰色砂質土、黄灰色土、褐灰色土と続き、地表下0.4mで地山である暗灰色粘質土となる。地山上面の標高は60.2mである。

第450次調査の検出遺構 奈良時代以前の溝、奈良時代の井戸・掘立柱建物2棟、平安時代の掘立柱建物2棟、鎌倉時代の掘立柱建物2棟、奈良あるいは平安時代の掘立柱建物1棟がある。

SD01は、発掘区南西隅で検出した蛇行する溝の一部である。長さ7.5mを検出した。幅2.45m、深さ0.9mである。埋土は黄灰色の粘土と砂の互層である。遺物が出土せず、時期は不明である。重複関係から、SB03より古いことがわかる。

SB02は、発掘区西で検出した南北棟建物である。桁行2間（3.6m）以上で、梁間は2間（3.7m）あったが、中央の柱穴が削平されたと考えられる。桁行の柱間寸法は1.8m等間である。重複関係から



第450次調査発掘区 南壁土層図 1/80



第450次調査 発掘区全景（北東から）



第453次調査 発掘区全景（北から）

SB03より古いことがわかる。

SB03は、SB02とほぼ同位置で検出した東廂付南北棟建物である。桁行3間（5.7m）、梁間2間（3.6m）で、柱間寸法は、桁行が北から2.1、1.8、1.8m、梁間が1.8m等間、廂の出は2.1mである。柱穴から上師器杯または甌、須恵器皿・甌・甕、鎌倉時代の瓦器焼、瓦質土器鉢が出土した。

SB04は、発掘区南壁沿いで検出した南北棟建物の北妻側柱列（3.6m）と考えられる。梁間2間で、SE05により中央の柱穴が壊されたと考えられる。柱穴から奈良時代の上師器杯または皿、須恵器杯または皿が出土した。

SE05は、発掘区南壁沿いで検出したほぼ円形掘形の井戸である。掘形は、東西1.2m、南北1.15m、深さ1.3mである。枠は残っていない。埋土から奈良時代中頃から後半にかけての土師器皿・皿・甌、竹籠入りの土師器甌、須恵器杯・杯蓋・甕が出土した。

SB06は、発掘区中央で検出した東西棟建物である。桁行3間（5.4m）、梁間2間（3.0m）で、柱間寸法は桁行1.8m等間、梁間1.5m等間である。重複開闢からSB07より古いことがわかる。

SB07は、SB06とほぼ同位置で検出した東西棟建物である。SB06より東へ桁行1間分大きく、桁行4間（6.8m）、梁間2間（2.8m）で、柱間寸法は桁行1.7m等間、梁間1.4m等間である。SB06の達替えと考えられる。柱穴から平安時代初めの土

師器 甌・甕、須恵器杯、平瓦が出土した。

SB08は、発掘区南東隅で検出した南北棟建物の北妻側柱列と考えられる。梁間2間（3.4m）で、柱間寸法は1.7m等間である。柱穴から奈良・平安時代の土師器皿または甌・甕、須恵器甌が出土した。

SB09は、発掘区南東隅で検出した建物の北西角で、北側柱列の西から1間（2.3m）分である。柱穴は、平面隅丸方形掘形で、他の建物の柱穴より大きい。一边0.8m、深さ0.4mである。柱穴から奈良時代の上師器甌、須恵器甌が出土した。

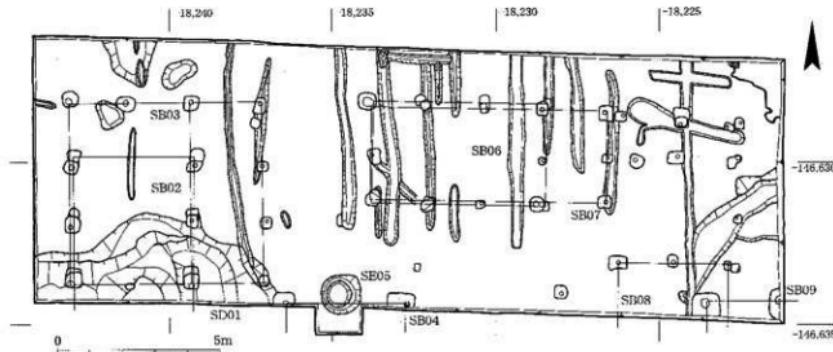
第453次調査検出遺構 奈良時代の井戸、掘立柱建物3棟、奈良・平安時代の溝2条、時期不明の掘立柱建物、掘立柱塀がある。

SA10は、発掘区西辺で検出した南北7間以上の塀である。柱間寸法は2.2m等間である。遺物が出土せず、時期は不明である。

SE11は、発掘区中央で検出した平面不定形掘形の井戸である。掘形は東西2.4m、南北2.0m、深さ1.2mである。枠は抜き取られていたが、枠に使用されたと考えられる曲物が出土した。奈良時代後半の土師器皿・須恵器杯・杯または皿、製塩上器、丸瓦・平瓦が出土した。

SB12は、発掘区北東で検出した南北棟建物である。桁行3間（6.3m）で、梁間は1間分を検出した。柱間寸法は桁行2.1m等間、梁間1.8mである。柱穴から土師器甌が出土した。

SD13・14は、発掘区南で検出した。SD13は南



第450次調査 遺構平面図 1/150

北溝で、長さ5.75m分を検出した。幅0.7m、深さ0.26m。SD14は東西溝で、長さ7.86m分を検出した。幅0.22m。SD13の北端とSD14西端が直角に接続する。いずれも、断面U字形で、埋土は上層（暗灰色砂質土）、下層（暗灰色土）の2層からなる。埋土から奈良・平安時代の土師器杯または皿・甕、須恵器杯が出土した。

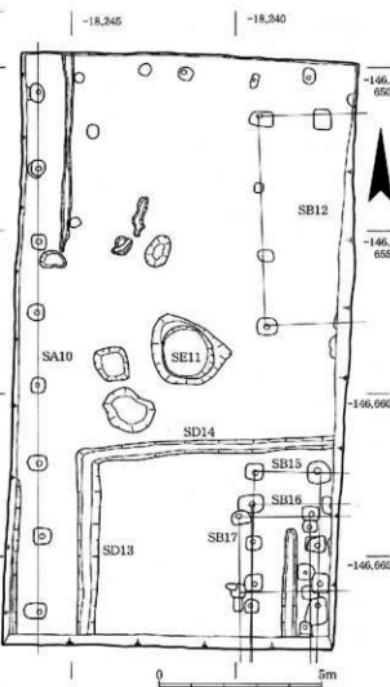
SB15は、発掘区南東隅で検出した建物で、西廂部にあたる。廂の出は1.9m。桁行は、2間分（4.2m）を検出し、柱間寸法は2.1mである。重複関係からSB17より新しいことがわかる。

SB16は、発掘区南東隅で検出した建物の北西隅である。東西、南北とも1間分を検出した。柱間寸法は東西、南北とも2.4mである。柱穴から土師器杯または皿・甕、須恵器甕が出土した。重複関係からSB17より古いことがわかる。

SB17は、発掘区南東隅で検出した建物で、東西、南北とも1間（2.4m）分を検出した。廂付建物か組柱建物である。
(秋山成人)

出土遺物 第450次調査では、瓦磚が遺物整理箱1箱分、土器が2箱分ある。第453次調査では、瓦磚が1箱分、土器が1箱分ある。

SE05出土の竹籠入りの土師器甕について述べると、底部外側は調整がなく、体部外側には縦方向のハケメとケズリがみられる。内面には、横方向のハケメと底部から体部下半に強いヨコナデがみられる。
(三好美徳)



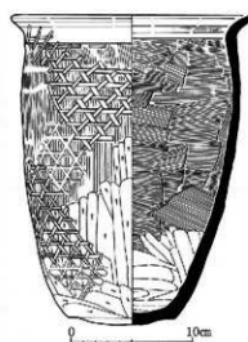
第453次調査 遺構平面図 1/150



井戸SE05全景（北から）



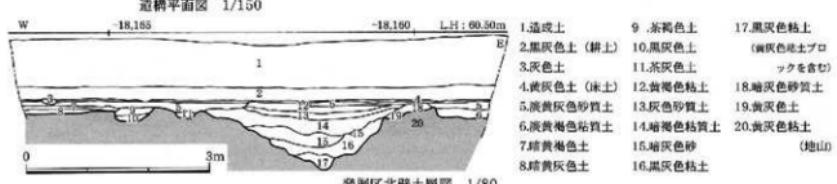
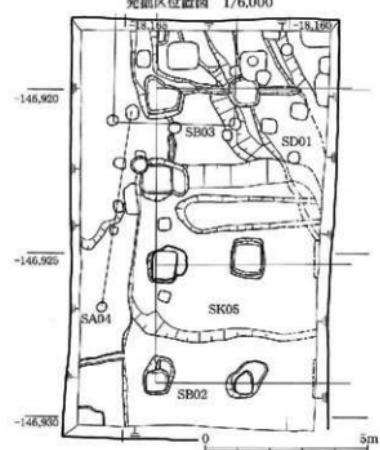
井戸SE05出土の竹籠入りの土師器甕 右1/4



井戸SE05出土の竹籠入りの土師器甕 左1/4

8. 南新遺跡・平城京跡（左京四条一坊十四坪）の調査 第457次

調査次数	IJ 第457次	調査期間	平成12年9月21日～10月12日
事業名	殷殿建設	調査面積	100nf
届出者名	宗教法人 観音庵	調査担当者	秋山成人
調査地	四条大路2丁目30-1		



調査地は、平城京条坊復原では、左京四条一坊十四坪南西に位置する。

周辺での調査には、今回の調査地の北東において、平成2年度に奈良県教育委員会が十四坪の北辺中央で行なったものがある。この調査では、大型の南廂付東西棟建物を含む、時期の異なる奈良時代の掘立柱建物3棟と弥生時代の堅穴住居5棟・溝12条・流路1条・土坑などが検出されている。また、十五・十六坪々境に位置する四条々間路の調査(IJ第81次・昭和59年度)において、平城京四条々間路とともに、弥生時代の土坑が検出されている。

また、調査地の南において、南新遺跡・左京四条一坊十三坪の調査(IJ第365次・平成9年度)、柏木遺跡・左京五条一坊十六坪の調査(IJ第338次・平成7年度、IJ第370次・平成8年度)があり、奈良時代の掘立柱建物・土坑・溝、弥生時代の方形周溝墓・土器棺墓・溝・土坑を検出している。

したがって、今回の調査は、奈良時代の十四坪内の様相を明らかにするとともに、調査地周辺に広がる弥生時代の遺跡の有無を確認することを目的とした。

発掘区内の層序は、上から造成土、黒灰色土(耕土)、黄褐色土(床土)と続き、地表下1.0mで淡黄灰色砂質土に至り、その下が黄褐色粘土の地山となる。淡黄灰色砂質土上面が奈良時代の遺構

の存する面で、標高は59.4m、黄灰色粘土（地山）上面が弥生時代の遺構の存する面で、標高は59.3mである。

検出遺構には、弥生時代の溝、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱列、平安時代の土坑がある。

SD01は、発掘区北東隅で検出した北西から南東方向に延びる断面U字形の溝である。長さ7.3mを検出した。幅2.9m、深さ1.1mである。埋土は、上から黄褐色粘土、灰色砂質土、暗褐色粘土質土、暗灰色砂、黒灰色粘土、黒灰色粘土（黄灰色粘土ブロックを含む）である。黒灰色粘土から弥生時代中期の土器（壺・鉢）、縄泥片岩製石包丁、安山岩製石鎌・小石刃、石斧、砥石が出土した。北で西に大きく振れているのは、周辺の弥生時代中期の遺構と同様で、遺跡の一部を構成するものと考えられる。

SB02は、発掘区中央で検出した大型の東西棟掘立柱建物である。桁行2間（5.4m）以上、梁間3間（9.0m）の南北附建物である。身舎の柱間寸法は、桁行・梁間とも2.7mで、廟の出は3.6mである。柱は全て抜き取られ、柱穴の底に礎板が残っていた。これまで十四坪で検出された建物のうちで最も大きいもので、梁間4間の南北両附建物である可能性も考えられる。柱の抜取り穴から奈良時代（8世紀）の須恵器杯が出土した。

SB03は、発掘区北半で検出した桁行1間（1.65m）以上、梁間2間（3.6m）の南北棟掘立柱建物である。梁間の柱間寸法は1.8m等間である。遺物は出土せず、時期は不明である。

SA04は、発掘区西辺で検出した南北2間（6.0m）の柱列で、国土方眼方位の北で8°東に振れる。柱間寸法は3.0m等間である。遺物は出土せず、時期は不明である。

SK05は、発掘区中央から東へ広がる隅丸方形掘形の土坑である。規模は東西5.7m以上、南北5.4mである。埋土は、上から赤褐色土、暗褐色粘土である。奈良時代及び平安時代初めの土師器杯・皿・甕、須恵器杯・壺・甕、丸瓦・平瓦・軒平瓦（型式不明2点）が出土した。重複関係から建物SB02より新しいことがわかる。

（秋山成人）



発掘区全景（北から）



弥生時代の溝SD01（北から）



溝SD01出土石器

9. 平城京跡（左京四条二坊八坪）の調査 第454次

調査次数	HJ 第454次	調査期間	平成12年8月22日～9月22日
事業名	店舗建設	調査面積	264m ²
届出者名	奈良スバル自動車株式会社	調査担当者	三好美穂
調査地	四条大路1丁目788、789-1、-2		



調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条二坊八坪の北辺中央部付近に相当する。八坪内での調査例はないが、隣接する一坪では、これまでに2度にわたって発掘調査が実施されており、1坪利用の大規模な建物群や平面八角形の類のない井戸柱を検出している¹⁾。また、同じ左京四条二坊内には、藤原仲麻呂の「田村第」推定地が、三条大路をはさんで北側の地域には「宮跡庭園」もあり、本調査地の周辺は、高位の人々の居住地域であったものとみられる。

今回の調査では、宅地内の様相を知る手掛かりを得ることをひとつの目的として、工事範囲内に東西12.0m、南北22.0mの発掘区を設けて実施したが、造成土が厚く堆積していたため、遺構面では約3/5の面積(156m²)になった。

発掘区内的層序 造成土(2.0～2.4m)の下に耕土(約0.2m)、明褐色砂質土(0.2～0.3m)、淡灰色砂質土(0.05m)が続き、地表下2.4～2.8mで黄褐色粘土の地山に至る。遺構が存する面は、地山上面(標高約58.7m)である。

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条二坊一坪』1987。

検出した主な遺構 古墳時代以前の溝1条及び土坑1基、奈良時代の掘立柱建物5棟、東西方向の溝1条、江戸時代の土坑5基などがある。

古墳時代以前の遺構 SD01は、SB03・04、SD08と重複して検出した溝で、北で東に振れる。長さ6.0m分を検出した。幅0.4～0.6m、深さは約0.1mである。溝内には黒褐色粘土が堆積しており、土師器片と縄文時代の石礫1点、剥片1点が出土した。2点とも安山岩製である。

発掘区の南西隅では、SB06・07と重複するSX02を検出した。東西2.0m以上、南北1.2m以上の平面方形の掘形になると推測される。深さは0.1mと浅い。土坑内には、土器片を含む黒灰色粘土が堆積していた。弥生土器と考えられるが、細片のため詳細については不明である。

奈良時代の遺構 掘立柱建物を5棟検出したが、全体の規模がわかるものはない。

SB03は、発掘区北西隅でSD08と重複して検出した建物で、SD08よりも新しい。柱掘形の一辺が約1.0m、柱間寸法は2.6m、深さは0.6～0.8mである。南東角の柱穴には抜き取り坑があり、埋土から8世紀の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が遺物整理箱で2箱分出土した。

SB04は、SB03とほぼ同じ位置で検出した。柱掘形の一辺は0.2～0.3m、柱間寸法が2.0m等間、深さは0.4mである。それぞれの柱掘形から、8世紀の土師器、須恵器、平瓦が少量出土した。

SB05は、発掘区中央で検出した東西3間(7.5m)以上、南北3間(7.4m)の身舎に南廊のつく東西棟建物である。柱掘形は一辺0.6～0.8m、深さは約0.4mである。身舎の柱間寸法は、北側柱列は2.4m等間、東側柱列は北から2.4、2.3mである。廊



発掘区全景（北から）



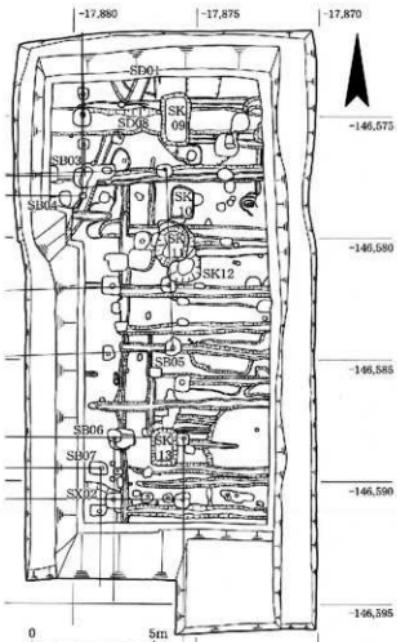
溝SD08全景（東から）

の出は2.4mである。各柱掘形の埋土から8世紀の土師器、須恵器、平瓦が少量出土した。東側柱列のうち、2つの柱穴が江戸時代の土坑SK11・12に壊されていた。国土方眼方位北で西に若干振れている。

SB06は、SB05の南側で検出した。柱掘形の一辺が0.3~0.8m、深さは約0.5mである。柱間寸法が2.4m等間の総柱建物になる可能性がある。

SB07は、発掘区南西隅で2つの柱穴を検出した。柱穴は、ともに長辺0.7m、短辺0.4mの平面長方形の掘形で、柱間寸法は1.8m、深さは0.4mである。8世紀の土師器、須恵器、平瓦が少量出土した。なお、SB06とSB07は、重複して検出しており、重複関係からSB06の方が新しいことがわかる。

SD08は、発掘区北端の東西方向の溝で、長さ9.5m分を検出した。幅1.0~1.2m、深さは0.1~0.2mと浅い。埋土から弥生土器、8世紀の土師器、



遺構平面図 1/200

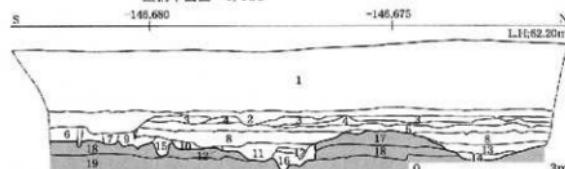
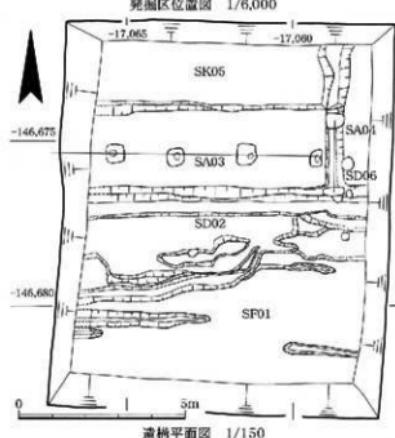
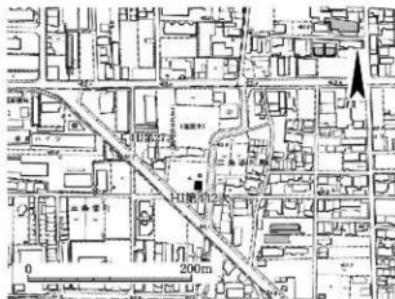
須恵器、転用硯、丸瓦、平瓦が少量出土した。溝心の国土座標値は、X=-146,575.200、Y=-17,874.000である。隣接する一坪で検出された坪内道路の南側溝SD3020とほぼ同じX座標軸上、X=-146,575.400にあることから、一坪同様、八坪内にも坪内道路が存在していたものと考えられる。

江戸時代の遺構 SK09~13は、南北に列なって掘削されていた土坑である。長辺2.4~4.2m、短辺2.0~2.4mの平面長方形の掘形で、深さ0.4~0.7m。いずれも、丸瓦、平瓦を包含する黄色粘土のブロックを含む黄色粘砂が堆積していた。SK11・13から8世紀の土師器、須恵器、近世陶磁器が、SK11からは元豐通宝（1078年初鋤）が1点出土した。これらの土坑は、調査地内の地山が良質な粘土であることから、粘土採掘坑である可能性が考えられる。

(三好美徳)

10. 平城京跡（左京四条三坊十六坪）の調査 第442次

調査次数	HJ 第442次	調査期間	平成12年4月10日～4月25日
事業名	共同住宅建設	調査面積	120m ²
届出者名	クボタハウス株式会社	調査担当者	秋山成人
調査地	三条添川町125-4		



調査地は、平城京条坊復原によると、左京四条三坊十六坪南辺中央に位置し、四条々間北小路に面する。調査地の東側には河川があり、調査地もまた、河川により遺構が壊されている可能性があった。このため、試掘調査を行ったところ、遺構・遺物を検出し、協議の上、本調査を実施した。調査は、十六坪南辺の様相と坪境小路の検出を目的に行った。

発掘区内の層序は、上から造成土、黒灰色土、黒灰色砂質土、暗褐色土、淡灰色土、茶褐色土と続き、地表下1.75mで地山である黄灰色砂質土、黄褐色土、黄灰色粘土に至る。また、発掘区の東辺に沿って黄褐色土（地山）上に、河川が氾濫した際に覆ったとみられる灰色砂礫が堆積する。地山上面の標高は概ね61.1mであるが、発掘区南辺では60.9mで、やや南に降っている。

検出遺構には、十五・十六坪の坪境を画す四条々間北小路と北側溝、掘立柱塀、掘立柱列、土坑がある。

SF01は、発掘区南部で検出した四条々間北小路である。路面幅2.0m以上である。

SD02は、発掘区中央で検出した四条々間北小路の北側溝である。堆積状況から、幾度か氾濫し、改修された様子がみとめられる。長さ8.6m以上、幅0.15m以上、深さ0.55mの溝が、最終的に輪

- | | |
|------------|-------------------|
| 1. 造成土 | 10. 黒灰土（SD02堆土） |
| 2. 耕土（黒灰土） | 11. 黑灰土（SD02堆土） |
| 3. 黑灰土砂質土 | 12. 黑灰土（SD02堆土） |
| 4. 暗褐色土 | 13. 黄灰色砂土（SK05堆土） |
| 5. 淡褐色土 | 14. 暗褐色砂土（SK05堆土） |
| 6. 淡灰褐色質土 | 15. 黑灰土 |
| 7. 疏褐色土 | 16. 黄褐色土（SD02堆土） |
| 8. 茶褐色土 | 17. 黄灰色砂質土（地山） |
| 9. 黄褐色土 | 18. 黄褐色土（地山） |
| | 19. 黑灰土砂土（地山） |

2.9mまで南に広がり埋まつたものと思われる。埋土は上から黒灰色土、茶灰色土、灰色土である。溝心の国土座標は、X = -146,677.25, Y = -17,066.20である。左京四条四坊十五・十六坪の坪境で検出されている（IL第199次・平成2年度）四条々間北小路北側溝溝心の国土座標が、X = -146,675.00, Y = -16,475.00であるから、この2点を結ぶ線は、国土方眼方位に対し、E 0° 11' 55" Nの振れとなる。出土遺物は、8・9世紀の土師器皿・壺・甕、須恵器杯・皿・壺・甕、墨書き土器、製塙土器、転用硯、漆器、丸・平瓦、凝灰岩がある。なお、SD02から南西へ分岐するように斜行する、長さ5.5m以上、幅0.4m、深さ0.4mの溝があり、路面を横切る暗渠、あるいはSD02が氾濫した跡が残つたものと考えられる。

SA03は、四条々間北小路北側溝SD02の北で検出した坪の南辺を画する掘立柱塀で、東西3間分を検出した。柱間寸法は2.1m等間である。

SA04は、SA03の東に隣接する南北1間の掘立柱列である。重複関係からSD02がある程度埋まつた後、あるいは南に広がつた後に建てられたと思われる。柱間寸法は2.1mである。発掘区が限定されているため、明らかでないが、十六坪の南面に開く門の一部の可能性がある。

SK05は、発掘区北で検出した土坑である。規模は、東西7.9m以上、南北2.5m以上で、発掘区外西と北へ広がる。掘形は、平面が方形で、急傾斜で降り、底は平らである。南辺がSA03に沿うことから、その雨落溝の可能性がある。また、後述するSD06が暗渠であると考えると、掘立柱塀SA03の前に築地塀が想定され、その築成の際の土取り坑とも考えられる。埋土は、上から黄灰色粘土、淡灰色粘土である。出土遺物には、8世紀の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・甕、製塙土器、丸・平瓦、軒丸瓦（6301型式B種）がある。

SD06は、SD02とSK05とをつなぐ溝で、北端はSK05の南東隅につながる。長さ2.3m、幅0.5m、深さ0.6mである。埋土は茶灰色土で、8世紀の土師器甕、須恵器甕・壺の小片が出土した。重複関係からSA07より古い。

（秋山成人）



発掘区全景（北東から）



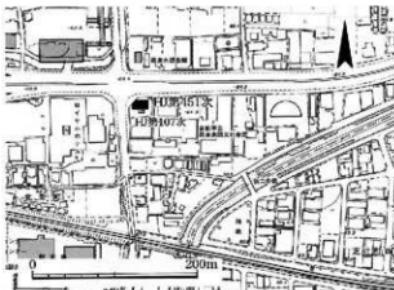
発掘区全景（西から）



溝SD02断面（東から）

11. 平城京跡（左京二条三坊四坪）の調査 第451次

調査次数	HJ 第451次	調査期間	平成12年7月17日～8月2日
事業名	共同住宅建設	調査面積	303m ²
届出者名	株式会社大和産業	調査担当者	武田和哉
調査地	法華寺町214-1、ほか		



発掘区位置図 1/6,000



発掘区全景（西から）



発掘区全景（東から）

調査地は、平城京の条坊復原では、左京二条三坊四坪の西北隅付近に該当しており、西辺では、東二坊大路東側溝および四坪の東辺を限る築地が想定されている。調査地内では過去に調査事例が1件あり（市HJ第107次調査・昭和60年度）、奈良時代の東西4間分（約4.6m）の掘立柱塀、土坑、溝を検出している。

今回の調査では、市HJ第107次調査で検出した遺構の続きの確認と、東二坊大路東側溝および四坪西辺の築地の検出を主な目的とし、東西約24m、南北約13mの発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、上から、造成土（1.4～1.5m）、黒褐色粘土（耕土、約0.2m）、褐色粘質土（床土、約0.1m）、灰褐色粘質土（約0.15m）、茶灰色粗砂質土（約0.15m）、灰色砂（約0.1m）であり、橙灰色粘質土と灰色砂（0.2～0.3m）、暗灰色粘土と灰色細砂（0.2～0.3m）が互層となって続く。その下に暗灰色粘土（約0.4m）があり、地表下3.0m～3.3mで暗褐色粘土または黄褐色粘土の地山に至る。

遺構が存する面は地山上面で、西へ緩く下降し、東から中央部分が高くなっている。したがって、地山上面の標高は、発掘区中央から東では60.5mであるが、西端では60.2mである。

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物4棟、掘立柱塀6条、土坑、溝などである。

SB01は、発掘区北西部で検出した掘立柱建物である。東西2間（4.8m）、南北1間（2.4m）以上で、発掘区外北へつづく。柱穴の重複関係からみて、後述のSA05よりも新しい。

SB02は、発掘区南西隅で検出した掘立柱建物である。東西1間（1.8m）以上、南北1間（1.8m）以上で、発掘区外西および南へとつづく。東廂付

建物か総柱建物とみられる。

SB03は、発掘区南辺中央で検出した掘立柱建物である。東西2間（4.2m）、南北1間（2.1m）以上で、南側は発掘区外へ続く。

SB04は、発掘区中央南寄りで検出した東西棟の掘立柱建物である。東西3間（5.4m）、南北1間（1.8m）以上で、発掘区外南へとつづく。遺構の重複関係から、後述のSA10より古い。

SA05は、発掘区北辺中央で検出した東西2間（3.6m）の掘立柱屏である。発掘区外北へと続く建物の南側柱列である可能性もある。

SA06は、発掘区南西部で検出した東西3間（6.0m）の掘立柱屏である。

SA07は、発掘区中央北寄りで検出した東西3間（5.4m）の掘立柱屏である。

SA08は、発掘区東部で検出した南北2間（3.6m）の掘立柱屏で、発掘区外北へとづく可能性がある。

SA09は、発掘区東北部で検出した南北2間（3.6m）の掘立柱屏である。発掘区外北へと続く可能性があり、建物の西側柱列の一部である可能性もある。

SA10は、発掘区南東部で検出した東西3間

（6.3m）の掘立柱屏で、発掘区外東へと続く可能性がある。遺構の重複関係からみて、後述のSK11よりも古い。

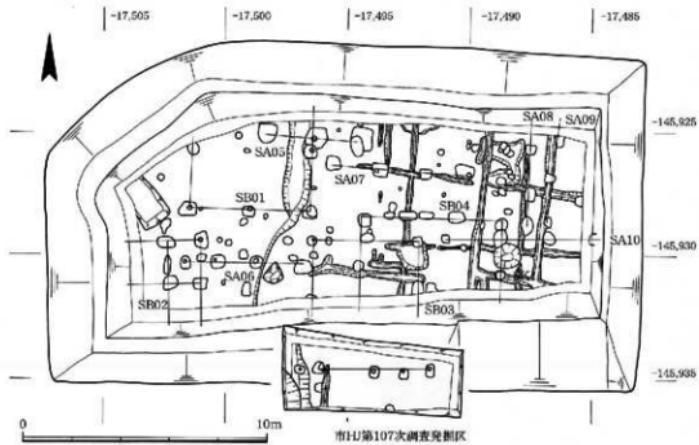
このほかに検出した柱穴は多数あるが、明確に建物や柱列としてまとまらない。

SK11は、発掘区南東部で検出した土坑である。掘形は、径1.0～1.1mの平面橢円形を呈する。深さは約0.35mである。埋土から軒平瓦6681型式B種1点を含む、奈良時代の瓦片と土器片が出土した。

出土遺物は、整理箱約6箱分（土器約2箱、瓦約4箱）ある。大半が奈良時代の遺物であるが、ごく少量ながら中世の土器片も含まれる。

今回の調査では、当初想定されていた東二坊大路の東側溝や四坪西辺を限る築地等の閉塞施設などの遺構は検出できなかった。また、市HJ第107次調査で検出した遺構と関連があると考えられる遺構についても検出することはできなかった。しかし、奈良時代の掘立柱建物や屏などの遺構を多く検出した。これらの遺構は、重複関係から推測すると、少なくとも2時期程度の変遷が確認できる。

（武田和哉）



遺構平面図 1/200

12. 平城京跡（左京五条一坊十四坪）の調査 第458次

調査次数	HJ 第458次	調査期間	平成12年10月13日～10月23日
事業名	仮称柏木東西線道路改良工事	調査面積	50m ²
届出者名	奈良市長	調査担当者	池田裕英
調査地	柏木町528-4、ほか		



調査地は、平城京の条坊復原では、左京五条一坊十四坪のほぼ南辺に位置し、敷地の東端は、東一坊大路の西側溝が想定される場所にある。十四坪内ではこれまでに奈良市教育委員会が3度（第249次・平成4年度、第395次・平成9年度、第438次・平成11年度）の発掘調査を行っており、奈良時代の遺構のほか、古墳時代の建物や溝もみつかっている。

今回の調査は、奈良時代については、東一坊大路西側溝の検出、十四坪内南辺の様相の解明を、古墳時代については、遺構の確認を目的として、調査敷地が東西に長いので、発掘区を西・中・東の3箇所に分けて実施した。

西発掘区 層序は、上から造成土、黒灰色土（耕土）、暗茶灰色土（床土）、橙灰色土と続き、地表下0.4mで黄褐色粘土の地山に至る。遺構の存する面は地山上面で、その標高は概ね57.5mである。

検出した遺構は、土坑1基、柱穴3個、耕作に伴う小溝3条である。

SK01は、東西1.1m、南北0.5m以上、深さ0.2mの土坑である。遺物が出土しなかったため、時期は不明だが、重複関係から小溝より古いことが分かる。

柱穴は、建物の一部であると思われるが、発掘区が狭小なため、棟方向など詳細は不明である。

中発掘区 層序は、西発掘区と同様で、上から造成土、黒灰色土（耕土）、暗茶灰色土（床土）、橙灰色土と続き、地表下0.4mで黄褐色粘土の地山に至る。地山上面が遺構の存する面で、標高は概ね57.3mである。

検出した遺構は、耕作に伴う小溝2条と不整形な土坑1基のみである。

東発掘区 敷地の東端部で、東一坊大路西側溝が想定される位置である。

発掘区内の層序は、上から造成土、淡灰褐色砂質土、暗灰褐色土（耕土）、茶灰色土（床土）、橙灰色土、暗灰褐色粘質土、暗灰茶色粘土、橙灰色粘土、綠灰色粘土、黒灰色粘土である。

東発掘区は、暗灰褐色粘質土以下の層相が西、中発掘区と異なり、また、東一坊大路西側溝が想定される位置であることから、全体が東一坊大路西側溝内にあると判断された。暗茶灰色粘土以下が側溝埋土と思われる。側溝の深さは、発掘区が狭く、湧水が激しかったため、1.3mまでを確認した。また、側溝の掘り込み面は不明だが、発掘区西端で、橙黄色粘土の地山を検出したので、側溝の西辺は、これより西にある。したがって、幅、深さとともに不明である。

側溝埋土から、奈良時代の土器と、小片であるため、時期の特定ができない瓦器が出土した。瓦器は、淡橙灰色粘質土層、黒灰色粘土層から出土しており、黒灰色粘土層は、後述する西側溝の深さからみて、溝の中位にあたると考えられる。

東一坊大路西側溝については、本調査地から北約220mのところで実施した市第316次調査（平成6年度）で検出しておあり、検出面での幅12.5m、溝底での幅約4m、深さ2.5mであった。溝からは10世紀末頃の黒色土器B類が出土しており、長岡京遷都以降も10世紀末頃までは溝が機能していたことがわかっている。また、溝の上面を覆う遺物包含層出土の遺物からみると、12世紀頃までには溝としての機能を失っていたとみられている。

ところが、今回の調査では、溝の中位から瓦器が出土しており、詳細な時期は特定できないものの、瓦器の出現の時期を考えると、11世紀中頃～末頃まで溝が機能していた可能性が高くなかった。

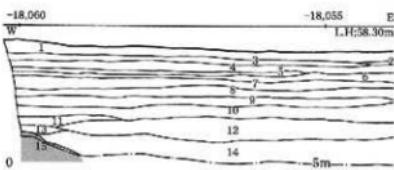
なお、地表下約0.5mの暗灰褐色粘質土の上面（標高57.1m）で耕作に伴う小溝を検出した。

今回の調査では、発掘区が狭かったため、建物や井戸などは検出できず、十四坪内の様相をうかがうことはできなかった。また、周辺での事例のような古墳時代の遺構もなかった。

（池田裕英）



東発掘区全景（西から）



1	造成土	9	暗茶灰色粘土
2	淡灰褐色砂質土	10	淡橙灰色粘質土
3	暗褐色土	11	綠灰色粘土
4	暗灰褐色土	12	黒灰色粘土
5	茶灰色土	13	褐茶色粘土
6	暗茶灰色土	14	褐灰色粘土
7	綠灰色土	15	橙黄色粘土 (堆山)
8	暗灰褐色粘質土		

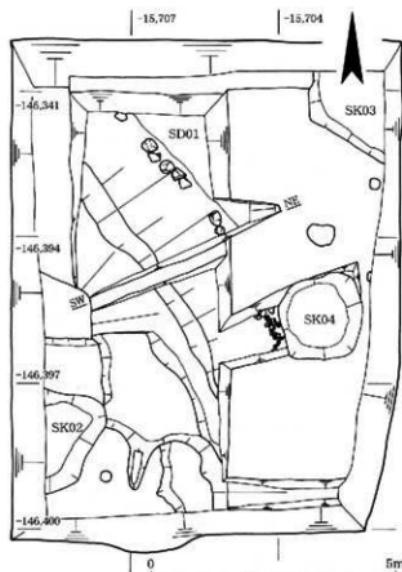
蓋構平面図（上）1/100・東発掘区北壁上層図（下）1/80

13. 平城京跡（左京三条六坊六坪）・奈良町遺跡の調査 第449次

調査次数	HJ 第449次	調査期間	平成12年7月10日～7月28日
事業名	共同住宅建設	調査面積	80nf
届出者名	アーバンライフ株式会社	調査担当者	山前智敬
調査地	林小路町48-1、ほか		



発掘区位置図 1/6,000



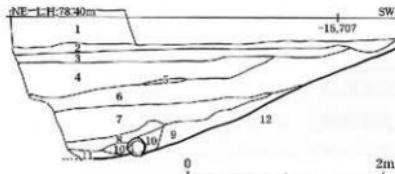
遺構平面図 1/100

調査地は、平城京の条坊復原では、左京三条六坊六坪の中央やや南西寄りに位置する。また、中世・近世において奈良町として栄えた地域に該当する。六坪内ではこれまでに調査例ではなく、隣接する五坪と十二坪で調査が行われている。五坪で行った市第269次調査（平成4年度）では、古墳時代と平安時代後半から江戸時代までの遺構が、十二坪で行った市第89次調査（昭和60年度）、市第176次調査（平成元年度）、市第228次調査（平成3年度）では、奈良時代から江戸時代までの遺構が検出されている。今回は、平城京の六坪内の様相を把握することに加え、奈良町遺跡の様相を知るために、調査を行った。

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、黒色土、暗褐色土、褐色土で、その下に黄褐色土（中世の遺物を含む）。以下、黒褐色土まで整地土）、暗褐色土（中世の遺物を含む）、暗褐色土（地山ブロックを混入する）、黄褐色粘土、黒褐色土と続き、地表下約1.9mで明黄茶色砂礫の地山に至る。遺構が存する面は2面あり、整地土（黒褐色土）上面と地山上面である。整地土上面は中世および近世の遺構が存する面で、地山上面は平安時代以前の遺構が存する面である。中世および近世の遺構面の標高は概ね79.0m、平安時代以前の遺構面の標高は概ね78.2mである。平安時代以前の遺構の検出は、発掘区西半と東半の一部とにとどめた。

検出遺構は、整地土上面では、中世の土坑と柱穴および近世の土坑が、地山上面では、平安時代以前の濠と平安時代の土坑がある。

SD01は、平安時代以前の濠と思われる。長さ10m分を検出した。東岸が発掘区外にあるために幅員は不明であるが、6.5m以上である。深さは約1.3mである。北東方向に降る西岸斜面の最下部に、



溝SD01断面図 1/50

岸に沿うように人頭大あるいはこぶし大の礫が並んでいる。こぶし大の礫が並んでいるところは、後述するSK04によって壊されているのかもしれない。石列は、SD01の護岸と考えられる。SD01は、礫により護岸されていた時期があったものと考える。埋土から5世紀の埴輪、8世紀の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、10世紀の土師器、黒色土器、12世紀末の瓦器、砥石、鉄釘が出土している。下位の埋土である黄灰色粘質土からは10世紀の土師器、黒色土器が出土しているので、この時期から埋まりはじめ、12世紀末には埋没したものと思われる。

SD01が濠とすれば、古墳の周濠の可能性があるが、古墳時代の出土遺物が極めて少ない。また、自然の谷の可能性も考えられるが、埋土の堆積状況に、水が流れた形跡が確認できない。ただ、底部に礫を並べていることから考えて、人の手が加えられていることは、間違いないと思われる。

SK02は、発掘区南西で検出した平安時代の土坑である。東西1.2m以上、南北2.2m以上で、深さは約0.2mである。埋土から5世紀の埴輪、8世紀

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 黄褐色土（中层の整地土） | 7. 灰色粘質土（SD01埋土） |
| 2. 暗黃褐色土（中世の整地土） | 8. 黄色粘質土（SD01埋土） |
| 3. 潟青褐色土（SD01埋土） | 9. 暗黃色砂質土（SD01埋土） |
| 4. 暗灰褐色粘土（SD01埋土） | 10. 暗灰色粘土（SD01埋土） |
| 5. 潟褐色土（SD01埋土） | 11. 黄灰色粘土（SD01埋土） |
| 6. 暗黃褐色粘質土（SD01埋土） | 12. 明黃灰色砂砾（地山） |

の土師器、須恵器、12世紀中～後半の瓦器が出土した。

SK03は、発掘区北東隅で検出した中世の土坑である。東西1.5m以上、南北1.9m以上で、深さは0.4m以上である。埋土から8世紀の土師器、須恵器、13世紀の瓦器、青磁、中世の平瓦が出土した。

SK04は、発掘区中央やや東で検出した近世の土坑である。平面形は一辺約1.7mの方形で、深さは約2.9mである。埋土から17世紀初めの土師器、磁器、砥石、漆器、曲物、刀子、近世の丸瓦、平瓦、棧瓦、熨斗瓦などが出土した。垂直に掘り込まれていることから、井戸の可能性も考えられるが、調査の際にほとんど湧水もなく、枠がみられないで土坑とした。

今回の調査では、造構面が2面あることを確認した。また、中世に大規模な整地を行い、奈良町の一部として形成されていくことも明らかとなった。何層かある整地層には、地山の土が混じる層もあるので、中世に深く搅乱され、奈良時代の造構は壊されているものと思われる。

（山前智敬）



発掘区全景（北から）



溝SD01（北西から）

14. 平城京東市跡推定地（左京八条三坊六坪）の調査 第26次

調査次数 TI 第26次

調査期間 平成13年1月9日～3月6日

事業名 範囲確認調査

調査面積 420m²

調査地 杏町592

調査担当者 秋山成人



平城京東市跡推定地では、第1次調査からこれまで20年間継続して発掘調査を行っている。維続調査が始まった当初は、推定地の範囲を確認するためにそれぞれの坪の周囲を調査してきたが、ここ数年間は左京八条三坊六坪の調査を行い、この坪の内部の様相についての資料を蓄積している。

今回の調査地は、この六坪の西辺中央に位置し、西辺部の様相を明らかにすることを目的に調査を実施した。今回の発掘区の北隣には、TI第7次調査（昭和61年度）発掘区及びTI第24次調査（平成11年度）発掘区が、南隣にはTI第19次調査（平成8年度）発掘区があり、これらの発掘区から続く遺構も検出できた。

なお、本文中の遺構番号は、東市跡推定地内で付けている通し番号であり、隣接の発掘区から続く遺構のうち、今回の調査で遺構の性格が明確になつたものについては、遺構の種類を示す記号を変更したものがあるが、番号はそのままである。

発掘区の基本的な層序は、上から黒灰色土（耕土）、灰色土、赤褐色土、褐灰色土、地山である黄褐色土、灰色粗砂である。地山上面の標高は、

概ね55.5mであるが、発掘区南西では55.3mで、南西へ下降する。

検出遺構 奈良時代後半及び平安時代前半の掘立柱建物12棟、掘立柱塀2条、井戸2基、溝4条、土坑3基である。以下、遺構の種類ごとに記す。

掘立柱建物・塀については、一覧表に示した。建物の位置関係、重複関係から、変遷をみると、まず、小型の南北棟建物SB476と総柱建物SB486が建つ。その後、SB486のあとに比較的大型の南廂付東西棟建物SB487が建ち、その南側に柱筋の揃う南北棟建物SB441が建つものと思われる。その2つの建物の西側は塀SA481で仕切られ、SB476の南側に南北棟建物SB477が建つ。

ついで、SB477のあとに南北棟建物SB478とその南側に南北棟建物SB479が建つ。SB478とSB479は、同規模の建物である可能性が高く、南北に並び立っていたものと思われる。一方、東側では、SB487のあとに西廂付南北棟建物SB488が建ち、その北側を掘立柱塀SA484が区画する。

ついで、SB479のあとに東西棟建物SB480、SB488のあとに総柱建物SB489が建つ。建物・塀

の柱穴からは、わずかではあるが、奈良時代後半及び平安時代前半の遺物が出土しており、上記の変遷はこの間の変遷を示すものと思われる。

井戸は、発掘区北半でSE482を、発掘区南半でSE483を検出した。SE482は、平面不整形掘形の井戸である。掘形は一辺1.5m、深さ1.6mで、枠は抜取られている。抜取り穴の埋土から奈良時代の上師器、須恵器、製塙土器、平瓦が出土した。SE483は、平面隅丸方形掘形の井戸である。掘形は、東西2.3m、南北2.5m、深さ1.8mである。枠は、方形縦板組横桟留で、上部が抜き取られ、下部のみが残る。埋土から奈良時代後半の土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器、奈良三彩壺蓋、硯、転用硯、平瓦、丸瓦、斎串、下駄が出土した。

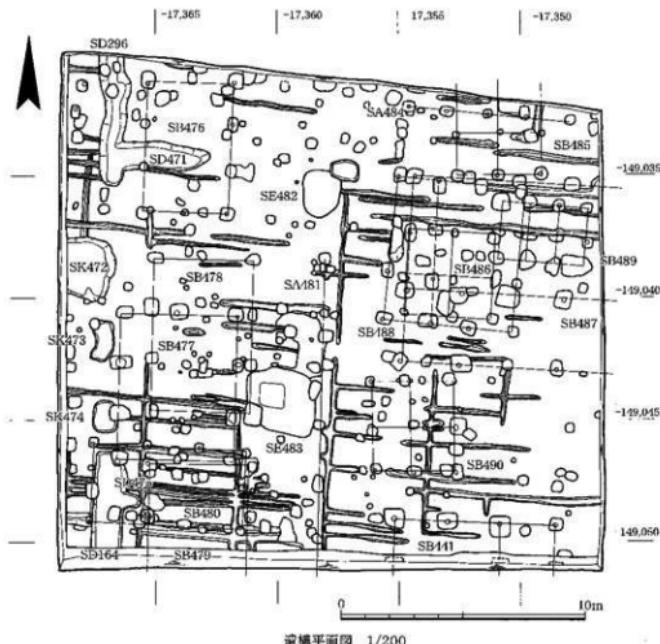
溝は、発掘区西辺北端でTI第19次調査発掘区から続く南北溝SD296とその南端近くに接続する東西溝SD471を検出した。SD296は、長さ5.2m分を検出した。TI第19次調査分を含めて全長11.45

mである。幅1.0m、深さ0.4mである。SD471は、長さ4.5m、幅1.1m、深さ0.22mである。

また、発掘区西辺南端でTI第7次調査発掘区から続く南北溝SD164とその北端近くに接続する東西溝SD475を検出した。SD164は長さ3.9m分を検出した。TI第7次調査分を含めて全長10.2mである。幅1.3m、深さ0.11mである。SD475は、長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.09mである。いずれの溝からも奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

土坑は、発掘区西辺中央で北からSK472・473・474を検出した。SK472は、平面不整形掘形の土坑で、東西1.6m、南北2.6m以上、深さ0.2mである。SK473は、平面不整形掘形の土坑で、東西1.7m、南北1.1m、深さ0.18mである。SK474は、平面隅丸方形掘形の土坑で、東西0.9m、南北1.3m、深さ0.56mである。いずれの土坑からも奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

これらの溝と土坑は一連の遺構として考えるこ



遺構平面図 1/200



発掘区全景（東から）



井戸SE474（南から）

とができる。南北溝SD296・164、土坑SK472・473・474は、八条三坊々間西小路に沿って南北に並んでおり、SK472を除き、いずれも東側溝から心々で約3.3m離れている。したがって、南北溝SD296・164は、六坪の西面築地に伴う兩落溝と考え、土坑SK473・474もまた、西辺を区画する施設を構成する構造の可能性が高い。また、東西溝SD471心とSD475心の心々間の距離は14mで、その中心の国土座標値（ $X = -149,041.300$ 、 $Y = -17,366.000$ ）は、六坪を南北に4等分した

北から3つの区分線に近い。土坑SK473・474は、いずれも柱が抜き取られた柱穴の可能性があり、西面する門の柱穴と考え、その東側に東西溝SD471とSD475に挟まれた空閑地を想定することもできる。（秋山成人）

出土遺物 土器、瓦磚、木製品があり、遺物整理箱にして、土器が19箱、木製品が1箱、瓦が2箱で、磚が9点である。

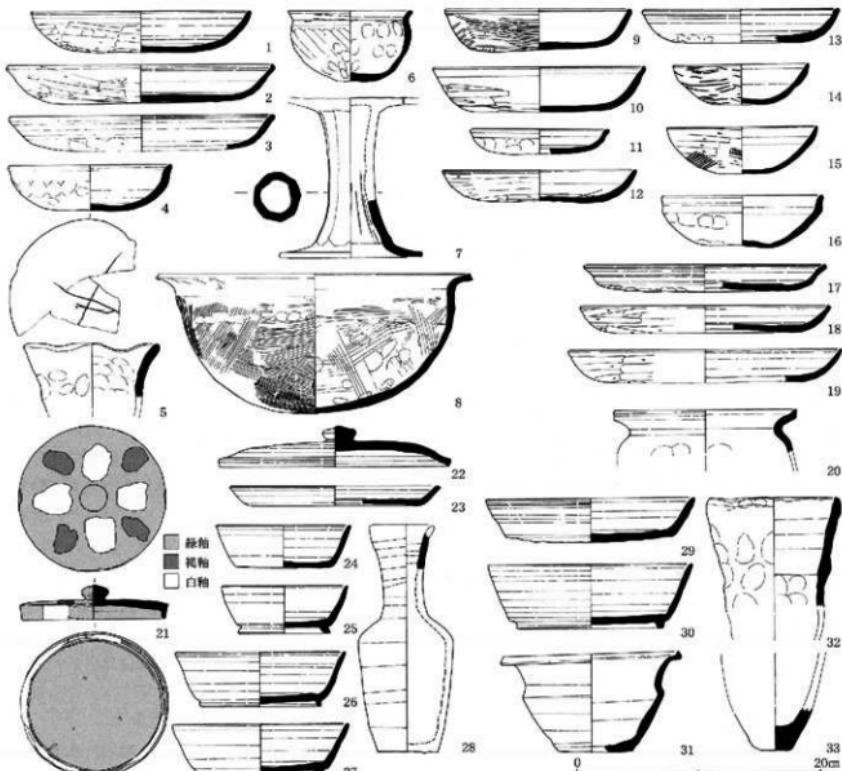
奈良・平安時代の土器が遺物整理箱で19箱分ある。このうち17箱分が、遺構から出土した。SE483出土土器は、器種が豊富で型式的にもまとまっており、枠内と抜き取り穴から、奈良時代後半の土師器、須恵器、奈良三彩、製塙土器が4箱分出土したので、これを報告する。また、掘形からは、奈良時代の中頃から後半にかけての土師器・須恵器が少量出土したが、碎片が多い。

枠内出土土器 土師器には、杯A、皿A・C、椀C、高杯、壺B、櫃、鍋、甕がある。

杯A（1～3）は、口径の大きさからI（2・3）とII（1）に分けられる。底部外面から口縁端部直下までをケズリ調整するもの（1・2）と底部外

据立柱建物・附一覧表

遺構番号	棟方向	横幅 桁行×梁間	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	通の出 m	備考
SB441	南北	1以上×2	1.8以上	4.2	1.8	2.1等間	2.4	TII第3次発掘時にまたがる。高輪。
SB476	南北	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	SD29より古。	
SB477	南北	3×2	8.1	4.5	北から1.6が1等間、2.1が3等間	2.35等間	柱穴から傳出孔。	
SB478	南北	3×2	12.6	4.2	2.1等間	2.1等間	SE474より新しい。	
SB479	南北	1以上×2	2.1以上	4.2	2.1	2.1等間	TII第7次発掘時にまたがる。	
SA481	南北	5.3上	11.4以上		北から2.4が3等間、2.1が2等間		TII第7次発掘時にまたがる。	
SB482	東西	3×1	6.3	3.0	2.1等間	3.0	国土方銀方に北で東に3" 断れる。	
SA484	東西	4	6.6		北から1.8、1.5、1.8、1.5		国土方銀方定位で東に5" 断れる。	
SB485	南北	1以上×2	1.8以上	3.6	1.8等間	1.8等間	国土方銀方定位で西に1" 断れる。SB475より新しい。蛇柱跡。	
SB486	東西	2×2	3.6	3.0	1.8等間	1.6等間	蛇柱跡。	
SB487	東西	3以上×2	7.5以上	6.3	2.1等間	2.4等間	2.7 SB472より古い。商。	
SB488	南北	3×2	5.85	3.6	1.95等間	1.8等間	1.8 国土方銀方定位で東に3" 断れる。SB480より新しい。西端。	
SB489	南北	3×2	3.6	2.4	1.2等間	1.2等間	国土方銀方定位で東に3" 断れる。SB480より新しい。蛇柱跡。	
SB490	南北	2×2	3.6	3.3	1.8等間	1.65等間	国土方銀方定位で西に1" 断れる。蛇柱跡。	



井戸SE483出土土器 1/4

面だけをケズリ調整するもの（3）がある。椀C（4）の底部外面上には、記号と思われる線刻（焼成前）がある。内面と口縁部外面上半はヨコナデ、その他は調整しない。高杯（7）は、脚部を円筒手法で成形。9面に面取りしており、内面はヨコナデ調整する。裾部外面上には、粗いミガキがある。盃B（6）は、口縁部外面と内面全体をヨコナデ調整するが、体部内外面は指頭圧痕が残る。鍋（8）は、体部内外面にハケメ痕跡が見られるが、内面の調整は粗く、成形時の当て具痕跡が残っている。

これらの土師器は、器表面の色調が褐色系（1）と灰白色系（2～4・6～8）に分けることができる。後者は、器表面だけが白く、断面は褐色系を呈するものが大勢を占める。高杯（7）の脚部外面上から脚部内面半ばまでは灰白色だが、脚部半ばから杯部との接合部までは褐色である。土中で器表面が変化したことも考慮する必要はあるが、褐色の器表面に白系の粘土を塗って仕上げた可能性も考えられる。

須恵器には、杯A・B、皿A・C、杯蓋、鉢A、壺G・L、甕がある。

杯A（24）は、ロクロナデ調整、底部外面上はヘラカリのままである。杯Bは、底部外面上をロクロナデ調整するもの（26）とヘラカリのまでももの（25・27）とがある。26の底部内面は、摩耗により、ロクロナデの調整痕が部分的に失われている。杯蓋（22）は、頂部外面上はヘラカリの後、ロクロナデ。内面は不定方向のナデ調整する。頂部内面から縁部内面の一部に墨が付着する。皿C（23）は、口縁端部が外傾するのが特徴である。口縁部内面には火拂が見られる。壺G（28）の底部外面上には、糸切り痕が残る。体部はロクロナデ調整。

この他に、奈良二彩壺蓋（21）と製塩上器（5）がある。21は、平坦な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなり、頂部中央には宝珠形のつまみがつく。黒色砂粒と雲母が若干混じった軟質の胎土である。頂部外面上は緑釉・褐釉・白釉（透明釉）の三色で、内面は緑釉の単色である。外面上は、上中で変色したらしく、全体的に黒みを帯びている。頂部内面中央には、三叉トチンの痕跡が残っている。5の全形は分らないが、口縁部は斜め外上方に開

いている。胎土に砂粒を多量に含む。口縁端部だけをヨコナデ調整する。

抜き取り穴出土土器 土師器には、杯A・B・C、杯蓋、皿A・C、椀A・C、高杯、壺B、鍋、甕、甌がある。また、枠内出土土器と同様に、器表面の色調が褐色系（10・11・13・15～18・20）と灰白色系（9・12・14・19）のものがある。

杯A（9・10）は、底部外面上から口縁部半ばまでをケズリ調整した後、粗いミガキ調整。9は小さく、口径15.1cmである。杯C（13）は、内面と口縁部外面上はヨコナデ調整、底部外面上は指頭圧痕が残る。器厚が6mmでやや厚い。皿Aは、口径の大きさからI（17～19）とII（12）に分かれる。12・18・19は、外面上全体をケズリ、17はヨコナデで調整。皿C（11）は、口径11.2cmの小形の皿。完存。椀A（14・15）は、小さな底部と斜め外上方へ大きく聞く口縁部からなる。14は、口縁部半ばからやや内轉ぎに立ち上がる。底部外面上から口縁部外面上は、ヨコナデやケズリの調整はせず、粗いミガキを施すだけである。15は、ケズリの後、ミガキ調整。椀C（16）の口縁端部は丸い。甌（20）は、球形状の体部になるとと考えられる。

須恵器には、杯A・B、杯蓋、皿C、高杯、壺H、甌がある。

杯A（29）は、口縁部外面上はロクロナデ、底部外面上はヘラカリのままである。底部内面は、ロクロナデで調整していると思われるが、摩耗により失われている。器厚が6mmと厚く、全体的にシャープ感がない。杯B（30）は、口縁部外面上をロクロナデ。底部内面は不定方向のナデ調整する。底部外面上はヘラカリのままである。壺H（31）は、底部中央には径2cmの穴が穿たれていた。焼成後によるもの。体部外面上の一部には二次的に火を受けたらしく、煤が付着している。完存。

この他に製塩土器（32・33）がある。胎土には砂礫を多量に含んでいる。内面はヨコナデで調整しているが、指頭圧痕の凹凸は著しい。32の口縁端部外面上は、焼けて赤く変色している。

以上、枠内と抜き取り穴出土土器の形態的特徴や手法・法量からみて、両者は奈良時代後半の同一塙式に属するものと考えられる。（三好美穂）

II 寺院跡の調査

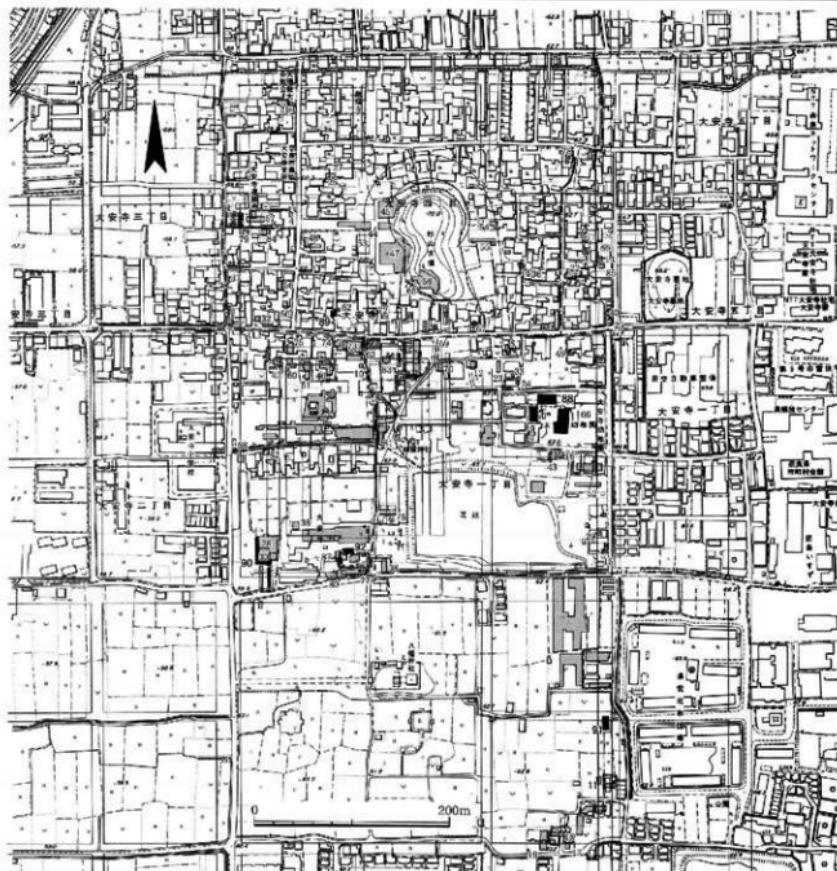
1. 史跡大安寺旧境内の調査 第88次～第92次

史跡大安寺旧境内では、平成12年度に5件の発掘調査を実施した。第88次から第91次までの4件

は現状変更許可申請に関わる調査で、第92次は保存整備事業に関わる調査である。

平成12年度 史跡大安寺旧境内発掘調査一覧表

調査次数	届出者	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA88	奈良市長	大安寺幼稚園新設事業	大安寺1丁目1250、ほか	平成12. 8. 3 ~	9.27	470m ²
DA89	個人	個人住宅建設	大安寺4丁目1056-1の一部、ほか	平成12. 8.21 ~	8.30	23m ²
DA90	大安寺	桜塚築造	大安寺町2丁目18-1	平成12. 9.28 ~	10.18	107m ²
DA91	個人	農業用倉庫建設	東九条町1405	平成12.11.27 ~	12. 5	72m ²
DA92	奈良市教育委員会教育長	史跡大安寺旧境内保存修復事業	大安寺2丁目1299-1	平成12.12. 4 ~	13.2.20	54m ²



史跡大安寺旧境内の調査 発掘区位置図 1/5,000

(1) 史跡大安寺旧境内（南大門）の調査 第92次

はじめに、南大門の発掘調査は、昭和29年に初めて実施された¹⁾。以後、平成11年度までに4回（市DA第38・77・80・87次調査）の調査を重ね、平成11年度以降は、史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る発掘調査を実施している。現在、これまでの成果をもとに整備が進んでいる。

南大門について、これまでに以下のことがわかっている。規模は、桁行5間、梁間2間、柱間17尺等間で、平城宮朱雀門と同規模の五間三戸の二重門が想定されている。礎石は残っていないが、礎石据え付け穴の位置から、門の中心（X=-148.117.64、Y=-16.847.82）が特定できた。作業場穴が礎石1つに対し、東西9尺、南北8尺の間隔で4つ配置される。少なくとも1つの礎石が、13世紀頃に据え替えられている。

基壇は、築成時に掘込地業がされている。底に厚さ0.3～0.4mの粘土を敷き、その上に厚さ0.05～0.14m単位で版築している。掘込地業の南端は、基壇南辺とほぼ一致する。基壇外装は凝灰岩を使用した壇正積であるが、改修されており、延石を凝灰岩切石から河原石に替え、地覆石より上部の部材も据え直し、あるいは据え替えている。河原石の裏込め上から、10世紀中頃～後半の上器が出土したことから、この時期に改修されていることが明らかになった。

基壇の南側の階段は削平されていたが、北側の階段は部分的に残り、門に取り付く築地は、東は削平されていたが、西は基底部が残っていた。

今回は、北階段西半部と西築地の状況と、基壇構造とその後の変遷の確認を主目的に、基壇の北辺に北発掘区、西辺に西発掘区を設定した。

北発掘区（口絵6） 南壁（基壇上）と北壁（基壇外）では、層序が異なる。南壁では、上から造成土（b）、淡茶色砂質土（f）、茶色砂質土（g）と続き、地表下0.3mで基壇造成土（標高62.35m）に至る。北壁では、南壁の茶色砂質土（g・j）以下、大量の瓦を含む茶色砂質土（m・

n）・赤茶色砂質土（o）、黄色粘質土（1）、茶褐色砂質土（2）、橙灰色砂質土（3）、淡茶灰色砂質土（A）、淡黄茶色砂質土（B）、黄灰褐色砂質土（C）と続き、明黄灰色粘土（G）の地山（標高60.65m）に至る。

茶色砂質土（m・n）からは、奈良・平安時代の瓦、上器、塑像や礎上片が出土した。その上の淡茶色砂質土（g・j）からは、13世紀の瓦器、15世紀末～16世紀初頭の土師器・瓦質土器、近世の陶磁器の他、階段耳石と思われる石材が出土した。1～3・A～C層の出土遺物については後述する。

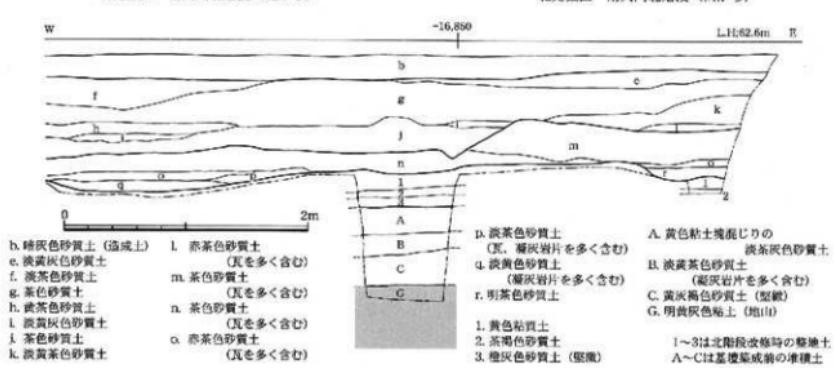
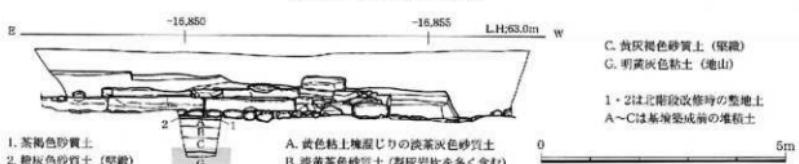
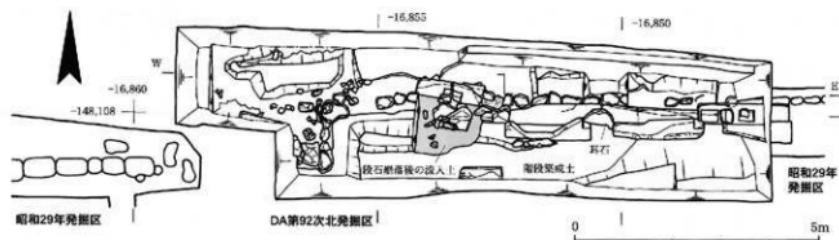
北階段 階段の西端は、門の西から2列目の柱通りにほぼ合致する。某塗の築成土は北階段部分に及び、門と階段は一体で築かれている。階段は、下部が厚さ0.1～0.2m単位で、上部が厚さ0.05～0.1m単位で版築されている。築成土は最も残りの良い部分で、最下の段石底面（標高61.45m）から高さ0.9m分が残っている。階段の出（基壇地覆石北端から段石北端まで）は約1.3mで、階段の幅（階段東端の地覆石東端から西端の地覆石西端まで）は約16.2mである。

階段は下から2段目までの段石が部分的に残っていた。築成土を段状に削って、段石を据えていたようである。段石は、1段目が、高さ0.3m、奥行0.42m、幅1.8～1.9mで、2段目が、高さ0.21m、奥行0.42m、幅1.7～1.8mである。これらの踏面は0.3m、蹴上は0.21mになる。

1段目の段石上面には、長辺0.35m、短辺0.25m、深さ0.15m位の枘穴がある。枘穴は門柱通りに1つ、柱間に2つ（1組）と規則的に配置される。西から3列目の柱通りの枘穴には、幅0.65m程度の凝灰岩切石が据えられていたが、この石の上面は削平されていた。これらの枘穴は、耳石に相当する構造物を据えるためのもので、階段を6つに区分していた可能性が高い。

最下の段石下で、階段の縁に沿ってL字状に巡る河原石列を検出した。

1) 大賀実・ほか「大安寺南大門、中門及び山門の発掘」『建築学会論文集』50 日本建築学会 1955。





北発掘区 南大門北階段段石の枘穴（北から）



北発掘区 南大門北階段の段石と耳石（北から）

北階段の改修が及ぶ層位 河原石の裏込め、すなわち最下の段石下の茶褐色砂質土（2）からは、9世紀中頃～後半の土師器、10世紀前半の土師器、10世紀後半～11世紀初頭の土師器・須恵器・黒色土器A類・灰釉陶器、10世紀末～11世紀初頭の土師器が出土した。また、この上層の河原石上面から最下の段石下部までを覆う黄色粘質土（1）からは、9・10世紀の黒色土器A類、10世紀後半～11世紀初頭の土師器が出土した。この層が階段改修後の最上層整地土で、この上面が階段改修後の地表面と考えられる。茶褐色砂質土（2）と黄色粘質土（1）には、11世紀初頭までの土器が含まれることから、先述した基壇外装とほぼ同時期の改修が推察できる。

茶褐色砂質土（2）より下層からも土器が出土しているが、時期が特定できたものは、橙灰色砂質土（3）から出土した9世紀の土師器片のみである。さらに下に淡茶灰色砂質土（A）、淡黄茶色砂質土（B）、黄灰褐色砂質土（C）が続く。これら3層は、厚さがいずれも0.15～0.3mで、遺物量は少ない。それに対して、その上の橙灰色砂質土（3）と茶褐色砂質土（2）は、各々が厚さ0.05m程度であるが、遺物量が多い。両者の堆積状況の差異から、橙灰色砂質土（3）は改修時の最下層埋土にあたり、淡茶灰色砂質土（A）以下は、基壇築成時あるいはそれ以前の堆積土と考える。

改修後の北階段の復原²⁾

2) 市DA第77・80次（平成10年度）調査の概要報告で、北階段東端の成果をもとに復原を試みている。今回、判明した階段の出はもとより、

の出が約1.3mであることが判明している。3段目以上の段石は確認できなかったが、2段目の段石と同法量で、葛石の高さは2段目の段石と同じ0.21mと考えた。

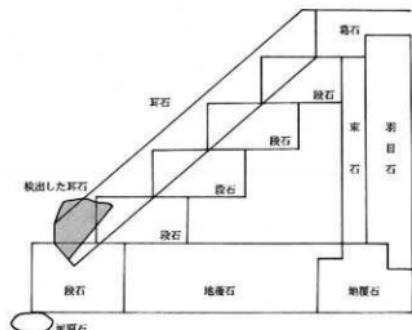
葛石を含め段石が5段以下の場合、葛石上面が市DA第38次調査で検出した築成土上面よりも低くなり、矛盾が生じる。6段で、踏面がすべて1段目と同じ0.3mとするならば、葛石北端が地覆石北端に比べると0.2m南に入り、東石、羽目石を据えることが難しい。しかし、葛石と地覆石の北端を揃えることを前提とするならば、2段目以上の踏面がすべて0.25mになる。結果、階段の高さ（地覆石底面から葛石上面まで）が1.35m、基壇上面の標高が62.8mに復原できる。市DA第38次調査で検出した築成土上面が標高62.65mであることから、門中央で、築成土は、敷石の厚さを含めて、0.15m程度削平されているようである。

西発掘区 層序は、上から造成土（a・b）、淡茶色砂質土（s）と続き、地表下0.7mで基壇築成土（標高62.0m）に至る。

西築地の基底部を検出したが、南北両端は削平されているため、基底幅はわからなかった。

門の基壇築成土と西築地は一体で築かれているが、改修の痕跡はなかった。築成土は、築地と門基壇の取り付け部で高さ約0.8m分残り、下の0.5mは0.05～0.25m単位で、その上の0.3mは0.02～0.1m単位で版築されている。

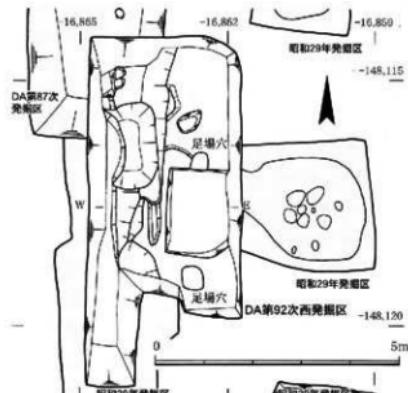
想定される階段の高さ及び段数を改める必要が生じた。



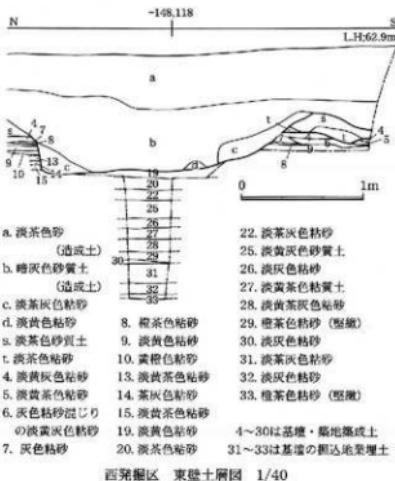
改修後の北階段（断面）復原模式図



西発掘区 全景（北から）



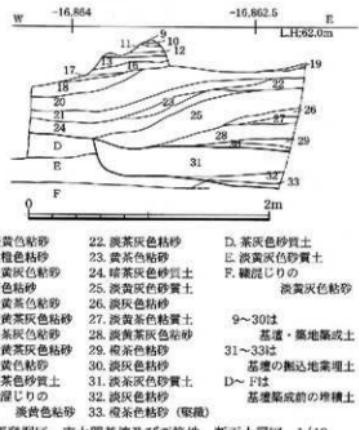
西発掘区 造構平面図 1/100



西発掘区 東壁土層図 1/40



西発掘区 南大門基礎及び西塀の断面（南から）



西発掘区 南大門基礎及び西塀地盤成土層図 1/40

出土軒瓦の型式と点数

	軒丸瓦					軒平瓦					
	6136E	6136J	6304D	型式不明	平安時代以前	6664A	6690A	6699A	6712A	型式不明	平安時代
北発掘区	4	1	3	4	14	3	1	1	15	1	1
西発掘区					1		1				
計	4	1	3	4	15	3	2	1	15	1	1

掘込地業 基壇西辺の茶灰色砂質土（D）上面（標高61.1m）で、掘込地業の西端を確認した。深さ約0.3mである。これで、市DA第77次調査（平成10年度）と合わせて、基壇の南辺と西辺で掘込地業の端を確認したことになる。

掘込地業の北端について、以下のように考える。基壇西辺で、掘込地業がされる茶灰色砂質土（D）上面と、北階段の段石下の淡黄茶色砂質土（B）上面の標高がほぼ合致する。このことと先述の堆積状況から、淡黄茶色砂質土（B）直上の淡茶灰色砂質土（A）以下は、掘込地業埋土とは考えにくい。よって、掘込地業の北端は北階段には及ばず、基壇の北辺までで収まる可能性が高い。

基壇外装及び北階段が改修されていることは、延石を凝灰岩切石から河原石に替えていたことが明らかである。しかし、門基壇と西築地の本体には、改修の痕跡がないことから、改修は基壇の周間に限られていたものと思われる。

なお、基壇築成土上面で、一辺0.5m程度の作業足場穴を2つ検出した。柱間は南北2.4mで、門西妻柱から西に約2.1mの位置にある。

出土遺物 瓦磚、土器・土製品、塑像、埴輪、鉄釘、鉄滓と壁土や凝灰岩切石の断片が、遺物整理箱で120箱分ある。その大半が瓦で、117箱分を占め、北階段北側に堆積する茶色砂質土（m・n）と赤茶色砂質土（o）から出土した。以下、主な遺物について記す。

瓦磚 大半が丸瓦と平瓦である。破片数と出土量の内訳は、丸瓦が3,508点（368.46kg）、平瓦が8,722点（947.935kg）、いずれか不明なものが4,354点（90.44kg）の計16,584点（1,406.835kg）である。平瓦には、凸面に格子タタキのあるも

のが561点（83.22kg）含まれる。

奈良時代の軒瓦の型式と点数は、別表の通りである。平安時代以降の軒丸瓦15点の内訳は、平安時代前期の蓮華紋軒丸瓦が5点、平安時代後期の蓮華紋・宝相華紋軒丸瓦が各1点、他は巴紋軒丸瓦である。宝相華紋軒丸瓦は、大安寺では初出のものであるが、薬師寺、唐招提寺で同範と思われるものが出土している。平安時代の軒平瓦1点は、後期の唐草紋軒平瓦である³⁾。

他に綠釉瓦が1点、熨斗瓦が261点、面戸瓦が2点、磚が19点ある。綠釉瓦は、平面方形の平板状のもので、5.8×4.2cm大的の隅部断片である。厚さ0.9～1.1cmで、周縁は薄く仕上げられ、外面すべてに施釉される。形状や胎十、焼成、色調は、大安寺で出土している二彩の飛檐垂木先瓦に似るが、施釉箇所と单彩である点が異なる⁴⁾。

土器・土製品 遺物整理箱で2箱分ある。奈良・平安時代の土器類、須恵器、黒色上器A類が大半を占める。その大部分が、北階段北側の茶色砂質土（m・n）から出土した。他に灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、陶磁器と奈良三彩壺片が4点、唐三彩陶枕片が1点、碗片が1点、半球状の土製品が9点ある。この土製品は大きさを基準に、直径3.0～3.3cmで高さ1.1～1.3cmのもの（8点）と、直径3.5cmで高さ1.5cmのもの（1点）に分類できる。型で成形し、丁寧なナデ調整が施され、胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡茶色である。何かの部品の可能性があるが、剥離した痕跡はなかった。

塑像（口絵7） 破片数で48点（2,441g）ある。大部分が北階段北側で、基壇を覆う茶色砂質土（m・n）から出土した。すべてが被焼しておらず、地中に埋没する前に焼けたことで、その一部

3) 蓮華紋軒丸瓦は、平安時代前後のものがNM01型式、後期の唐草紋軒平瓦はNM02型式と同範である。（「瓦・埴輪」『史跡大安寺旧境内』奈良市教育委員会、1997を参照。）宝

相華紋軒丸瓦は、薬師寺87型式と同範と思われる。（「瓦・埴輪」『史跡大安寺旧境内』奈良市教育委員会、1997を参照。）

4) 「瓦・埴輪」『史跡大安寺旧境内』奈良市教育委員会、1997を参照。



塑像Aの衣紋



塑像Bの縮毛表現



塑像Aの断面



塑像Bの直毛表現

が残ったものと考えられるが、心木や綱の痕跡を残すものではなかった。外観や製作技法のわかる断片が3点あり、うち2点が同一個体である（以下、塑像A・Bで示す）。

塑像A 長辺16cm、短辺12cm、厚さ5cm、重さ765gである。塑土は、荒土、中土、仕上土の3層からなる。荒土には、スサや直径1~5mmの石を混ぜた粘土を、中土には、荒土に混ぜたものよりも細かいスサや石を若干混ぜた粘土を、仕上土には、きめの細かい粘土を使い分けている。仕上土の表面には、衣服を表現した、衣紋と呼ばれるカーブや皺がある。衣紋の形状や塑土の法量から、等身大立像の胸部の断片と考えた。また、部分的に赤、黒の彩色があり、黒の上に赤を重ねて塗った箇所もある。蛍光X線分析で、成分分析した結果、赤色はベンガラであった⁵⁾。黒色についての分析はできなかったが、漆の可能性がある。

塑像B 長辺17cm、短辺8cm、厚さ7cm、重さ675gである。荒土は剥落するが、中土と仕上土は

残っていた。仕上土の表面には、歛状の隆起が5本以上あり、直毛の頭髪を束ねた状態を表現しているよう、髪は1本ずつ線刻している。また、ヘラなどで縮毛を表現している箇所もある。表面には、赤の彩色がわずかに残る。束ねた頭髪や直毛の表現は、菩薩や天部など様々な像の頭髪に類似はあるが、縮毛の表現は、菩薩や天部の頭髪にはみられず、一般的に四天王像が踏んでいる邪鬼の頭髪に限られる。現存する奈良時代の東大寺戒壇院の邪鬼（塑像）や西大寺四王堂の邪鬼（銅像）にも、同様の表現がある。

塑像A・Bは現存する塑像例からみて、赤、黒のみでなく、数色に彩られていた可能性が高い。

塑像A・B以外は小片であり、どのような種類の像であるかの特定はできなかった。しかし、赤や黒の彩色をわずかに残すものや、塑土が塑像A・Bと酷似するものが多いことから、塑像A・Bと同一個体の断片が、相当含まれるものと考えられる。

（宮崎正裕・三好美穂）

5) 宮内庁正典院事務所（成瀬正和氏）に分析を依頼した結果に基づいている。

(2) 史跡大安寺旧境内（小子房）の調査 第90次



北発掘区と大安寺本堂（西から）



北発掘区西半（北から）



北発掘区西半（南から）

当該地は、史跡大安寺旧境内の主要伽藍の南西隅にあたり、西僧坊（西中房南列）と伽藍外周の築地塀との間の空閑地で、主要建物は存在しないとみられていた場所であった。過去に大安寺本堂建設に関わる2件の発掘調査（市DA第28次調査、昭和61年度及び市DA第30次調査、昭和62年度）を実施したところ、「大安寺伽藍縁起井流記資財帳」には記されていない南北棟の基壇建物（礎石建物、瓦積外装の基壇）が発見され、その位置と規模から西小子房となる可能性が高いと判断された。そして、これらの遺構の重要度を鑑み、工事基礎が遺構に影響を及ぼさないように、砂で厚く覆って保存する措置が講じられた。

今回の申請内容は、大安寺境内西端と一段低い隣地の畠地との境界に擁壁工事を行なうものである。調査は、基壇建物の一部と調査地南端に想定される主要伽藍と塔院を限る六条大路を検出することを目的として行った。

工事対象地にL字形の北発掘区（発掘面積73.25m²）を、六条大路が推定される箇所には、東西1.5m、南北22.5m（発掘面積33.75m²）の南発掘区を設けて実施した。基壇建物にあたる箇所は、前回の発掘区と一部重複している。以下、発掘区ごとに概要を記す。

北発掘区 発掘区内の層序は、表土と暗褐色土(0.5m)の直下が整地土（明黄褐色土または暗赤



北発掘区南半（西から）

褐色土）である。この整地土は、先の調査で検出されており、整地が数回に渡って行われていることが判明している。今回新たに、発掘区西辺では東西0.7~1.4m、南北26.0m、南辺では東西12.0m、南北0.2~1.0m分を検出した。整地上西端と南端は、近世以降の掘削で壊されていた。遺構が存する面は、整地土上面（北端の標高59.8~60.0m、南端の標高60.0~60.2m）である。

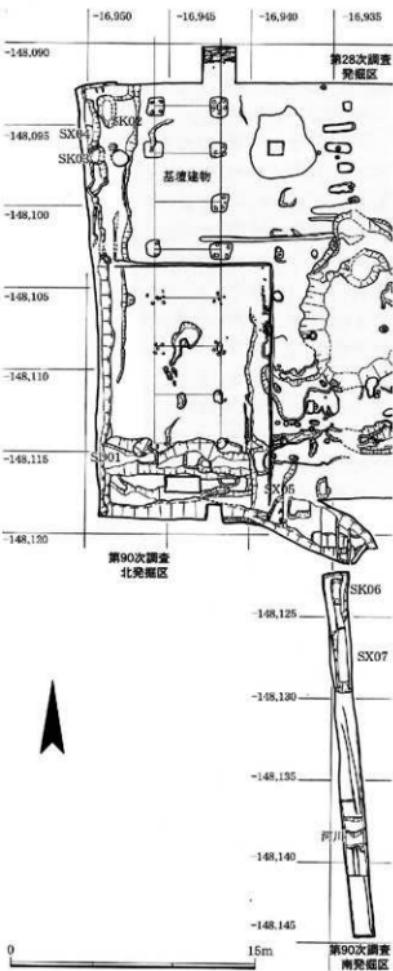
検出した主要な遺構には、溝（SD01）、土坑（SK02・03・04）、その他（SX05）がある。礎石建物の基壇盛土は、前回の調査の所見どおりで、今回の発掘区には及んでいなかった。

SD01は、南大門に取付く築地塀の雨落溝で、当初は地山に直接掘り込んだ溝であったが、数回の整地と改修とを重ねていることが前回の調査で判明している。今回新たに長さ0.6m分を検出した。溝幅は約2.4m、深さは約0.5mである。西端は発掘区外へ続くと考えられるが、近世以降の掘削により壊されていた。溝内には、土師器、須恵器、黒色土器A類、軒丸瓦（6138型式J種）、軒平瓦（6716型式C種）、道具瓦、丸瓦、平瓦を包含する褐色土及び淡褐色土が堆積し、土師器と黒色土器A類は、9世紀末～10世紀前半頃のものである。

SK02は、東西0.6m以上、南北1.8m、深さ0.3mである。埋土から、埴輪、軒丸瓦（6138型式C種と平安時代以降のもの）、軒平瓦（6664型式H



南発掘区全景（南から）



造構平面図 1/300

種)、平瓦、丸瓦、9世紀末～10世紀前半の土師器、黒色土器A類、綠釉陶器、灰釉陶器が遺物整理箱で2箱分出土した。

SK03は、東西1.0m、南北1.1mの平面円形の土坑で、深さは0.2mである。丸瓦、平瓦、17世紀頃の国産陶磁器が出土した。

SK04は、東西0.6m以上、南北6.0m、深さ0.3mの土坑である。8世紀の軒丸瓦(6137型式A種)、軒平瓦(6716型式C種)、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、9世紀末～10世紀前半の土師器、黒色土器A類、17世紀頃の国産陶磁器が少量出土した。

SX05は、市DA30次調査で検出されている南北方向の溝状の遺構である。幅約1.0m、長さ1.5mを検出した。深さは0.7mである。南端は近世以降の掘削により壊されている。遺構内には、8世紀の土師器、須恵器、軒丸瓦(型式不明)、軒平瓦(6716型式C種、6717型式A種)、丸瓦、平瓦、10世紀前半の土師器、および凝灰岩の破片を包含する暗赤褐色土、淡褐色土が堆積していた。

南発掘区 発掘区内の層序は、耕土の下に暗灰色粘土が堆積し、耕土から約0.4mで淡黄褐色粘土の地山に至るが、発掘区の中央部付近から南では黄褐色粘土の地山となる。遺構面は、地山上面(標高約58.8～59.0m)である。

主な検出遺構には、土坑(SK06)、河川、その他(SX07)がある。

SK06は、南北1.5m、東西1.5m以上の土坑で、深さは約1.7mである。土坑内には、8世紀の軒丸瓦(6138型式J種、型式不明)、軒平瓦(6661型式B種、6712型式A種、型式不明)、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、9世紀以降の軒平瓦、9世紀後半～10世紀の土師器、15～16世紀の土師器を包含する灰色粘土が堆積していた。

SX07は、東西方向の溝状の遺構である。南北約6.5m、東西1.2m以上、深さは約0.6mである。重複関係からSX06よりも新しいことがわかる。遺構内には、8世紀の丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、9世紀以降の軒丸瓦、9世紀後半の土師器、17世紀頃の国産陶磁器を包含する黄褐色粘土、灰色粘土が堆積していた。

この他に、六条大路の北側溝が想定される発掘

区南端では、幅8.0m以上の東西方向の河川を1.5m分検出した。埋土は、大きく上下2層に分けることができる。下層は、灰色粗砂と灰色砂の互層である。約1m掘り下げたが、湧水が著しく河床は確認できなかった。出土遺物はない。上層は、丸瓦と平瓦を包含する淡灰色砂と灰色粘砂土(厚さ約0.2m)である。下層と上層とは、堆積の状態が異なることから、一度、河川が埋まった後に小河川が形成されたと考えられる。小河川の幅は4.4mで、中軸の座標はX=-148,138.800であり、この小河川が六条大路北側溝にあたる可能性も考えられる。

出土遺物 円筒埴輪、土師器、須恵器、黒色土器A・B類、綠釉陶器、灰釉陶器、青磁、瓦器、陶磁器、製塩土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦(磚、熨斗瓦、面戸瓦)、円盤形土製品が遺物整理箱で71箱分が出土した。

このうちの66箱が、軒瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦である。総破片数は、丸瓦が1,970点(242kg)、平瓦が4,382点(433kg)、丸瓦か平瓦か判断できないものが1,264点(26kg)である。

8世紀の軒丸瓦の型式と内訳は、6137Aが5点、6138Caが1点、6138Cが1点、6138Eが4点、6138Jが4点、6231種別不明が3点、6304Dが4点、型式不明が18点で、ほかに9世紀以降のものが8点である。軒丸瓦6138Jは、大安寺旧境内では、22点確認されており、そのうち18点が本調査地周辺で出土している。基壇建物ないし近隣の建物の主要な軒丸瓦のひとつである可能性が高い。

8世紀の軒平瓦の型式と内訳は、6661Bが2点、6664Aが5点、6664Hが1点、6690Aが3点、6712Aが7点、6716Cが4点、6717Aが2点、型式不明が18点で、ほかに重弧紋が1点、9世紀以降のものが4点である。

まとめ 過去の調査では、「基壇建物は、SD01を埋めた後に構築された9世紀代の遺構」という漠然とした時期しかわかつていなかったが、今回の調査でSD01から9世紀末～10世紀前半の土器が出土したことにより、基壇建物の構築年代の上限を10世紀前半頃と考えができるようになった。

(三好美穂・宮崎正裕)

(3) 史跡大安寺旧境内（食堂并大衆院推定地）の調査 第89次

奈良時代の食堂の位置は、講堂の北と東のそれそれに想定する説があり、今回の調査地は、講堂の北の食堂推定地にあたる。調査地の北東隅接地で実施した市DA第62次調査（平成5年度）では、平安時代、室町時代の土坑を、東約30mで実施した市DA第72次調査（平成8年度）では、古墳時代の杉山古墳の周濠、平安時代の掘立柱建物と土坑、中世の土坑と溝などを検出しているが、両調査とも奈良時代の食堂にあたる遺構は確認されていない。したがって、今回の調査では、食堂の確認を主目的とした。

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、茶灰色土、灰褐色土、淡灰褐色土、灰色粘土、褐灰色粘土と続き、地表下約0.9mで明黄灰色粘土の地山に至る。遺構面は地山上面で、地山面は北から南に向かって下り勾配で、標高は61.1～61.3mである。

平安時代の遺構と室町時代の遺構を検出した。

SK01は、発掘区の北東隅で検出した土坑で、東西2.4m以上、南北1.7m以上、深さは約0.2mである。埋土から8・9世紀の土師器、須恵器、型式不明の軒丸瓦などが出土した。重複関係から後述のSK02、SK05より古い。

SK02は、発掘区北東で検出した平面隅丸方形の土坑で、一辺約1.2m、深さは約0.6mである。埋土から12・13世紀の土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、製塙土器、白磁、丸瓦、平瓦、鐵滓が出

士した。重複関係からSK01より新しい。

SK03は、発掘区南東で検出した土坑で、東西0.7m以上、南北1.4m以上、深さは約0.3mである。埋土から時期不明の土師器、軒平瓦6661型式B種が1点、6664型式A種が1点出土した。重複関係から後述のSK04より古い。

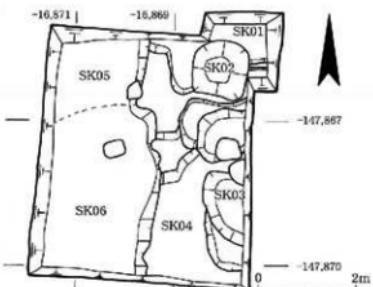
SK04は、周囲を後世の遺構で壊された土坑で、東西1.7m以上、南北3.9m以上、深さは約0.2mである。埋土から8・9世紀の土師器、須恵器、縁釉陶器、14世紀の瓦器が出土した。重複関係からSK03より新しく、後述のSK06より古い。

SK05は、南側を後述のSK06によって壊された土坑で、東西1.7m以上、南北1.2m以上、深さは約0.2mである。埋土から8世紀の土師器、須恵器、13世紀の瓦器、瓦質土器、中世の巴紋軒丸瓦1点などが出土した。重複関係からSK01より新しく、SK06より古い。

SK06は、発掘区の西半で検出した土坑で、東西2.2m以上、南北3.5m以上、深さは約0.3mである。埋土から13世紀の瓦器、15世紀末から16世紀初の土師器、瓦器、瓦質土器、中世の軒丸瓦1点、軒平瓦1点などが出土した。重複関係からSK04、SK05より新しい。

出土遺物は、他に軒平瓦6717型式A種が1点、青磁、繩の羽口などがある。

今回の調査でも、講堂の北では奈良時代の食堂にあたる遺構は確認できなかった。（山前智敬）



遺構平面図 1/100



発掘区全景（南西から）

(4) 史跡大安寺旧境内（賤院推定地）の調査 第88次

調査地は「賤院」の南半部にあたる。過去に「賤院」の南西隅では、礎石建物の根石や壇正積基壇、磚組の井戸などを検出している（県76-5次調査・昭和51年度、市DA第66次調査・平成6年度、市試掘98-1次調査・平成10年度）。

調査は、発掘区を3箇所に分けて実施した（西・北・東発掘区）。

基本層序は、造成土、耕上の直下が黄色粘質土あるいは黄色砂礫の地山である。遺物包含層がほとんど遺存しておらず、遺構の存する面は地山上面（標高62.6～63.0m）である。

主な遺構には、奈良時代あるいは平安時代の掘立柱建物・塀・溝・井戸・土坑がある。

SB01は、南北2間（3.6m）以上、東西1間（2.1m）以上の縦柱建物で、南北の柱間が1.8m（6尺）等間である。柱穴から奈良時代の土師器・須恵器、大量の製塙土器が、柱抜き取り坑から奈良時代の軒平瓦6712型式C種が1点出土した。

SB02は、南北2間（3.0m）以上、東西1間（1.5m）以上の南北棟東廂付建物で、柱間は1.5m（5尺）等間である。柱穴から平安時代前半の土師器・須恵器が出土した。

SB03は、桁行1間（1.8m）以上、梁間3間（7.2m）以上の南北棟西廂付建物で、梁間の柱間が2.4m（8尺）等間である。重複関係から後述のSK11・12より古い。柱穴から奈良時代末の土師器・須恵器・黒色土器A類が、柱抜き取り坑から奈良時代の隅軒平瓦6712型式A種が1点出土した。

SA04は、東西2間（6.0m）以上の塀で、柱間は3.0m（10尺）等間である。重複関係から後述のSK13より古い。柱穴から奈良時代の土師器・須恵器、製塙土器が出土した。

SA05は、東西1間（3.9m）以上の塀である。重複関係から後述のSK10より古い。柱穴から奈良時代の土師器・製塙土器が出土した。

SD06は、幅2m前後、深さ0.3mの南北方向の溝で、SD07は、幅1.2m前後、深さ0.2mの東西方向の溝である。SD06・07とともに発掘区外へ続く。重複関係からSD06はSD07より古く、SD07

は後述のSE08より新しい。いずれの溝からも平安時代前半の土師器・須恵器・黒色土器A類、製塙土器が出土し、それに加えて、SD06から奈良時代の軒平瓦6712型式A種・B種、同6716型式D種が各1点と凝灰岩切石の破片が出土した。

SE08は、掘形が南北2.4m、東西2.0m、深さ1.0mの井戸である。枠の大半が抜き取られているが、最下段の横板の一部が残る。枠抜き取り坑から奈良時代末頃の土師器・須恵器、製塙土器、奈良時代の隅軒平瓦6712型式A種が1点出土した。

SK09は、南北1.4m、東西1.6m、深さ0.3mの土坑である。埴輪と奈良時代の土師器・須恵器、製塙土器が出土した。

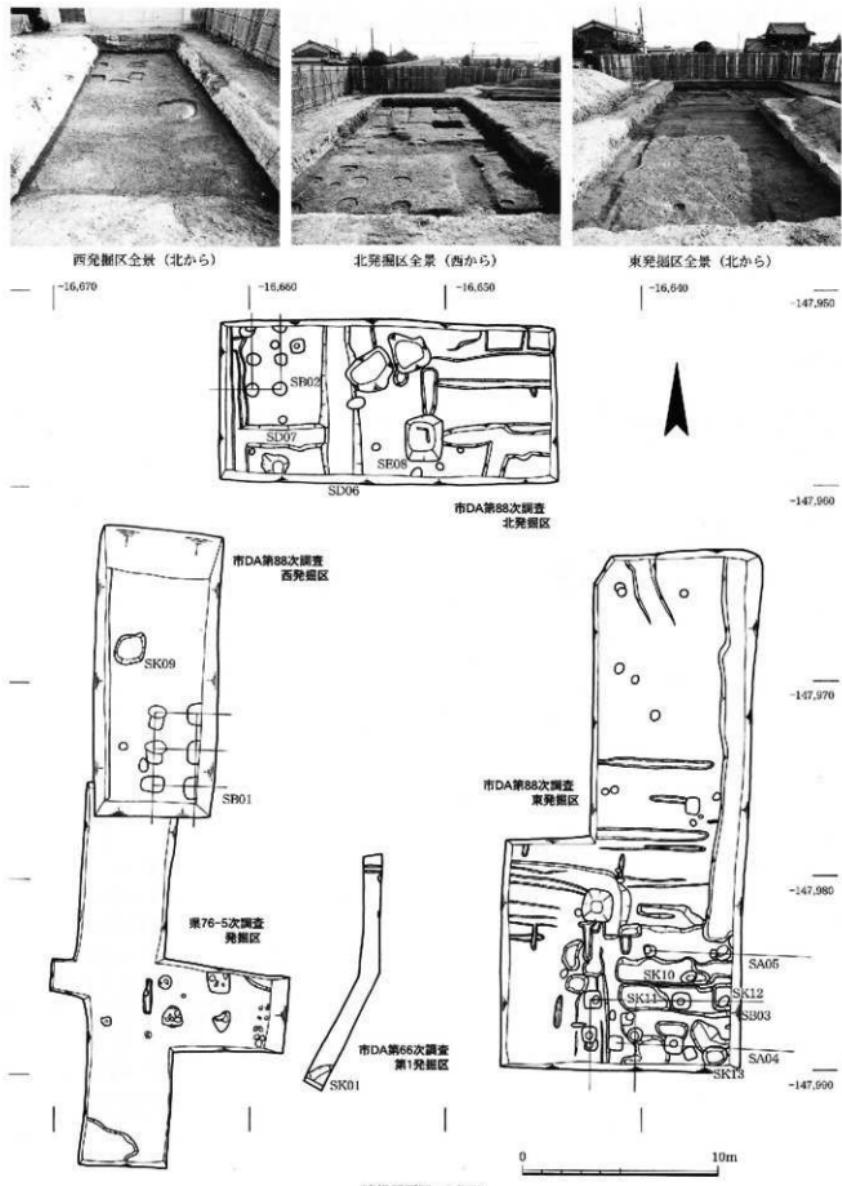
SK10・11は、いずれも南北1m前後の東西に長い土坑で、東西5.8m分を検出した。深さは、SK10が0.1～0.2m、SK11が0.2～0.4mである。いずれの土坑からも奈良時代の土師器・須恵器、製塙土器が、SK10から平安時代前半の綠釉陶器が、SK11から平安時代の黒色土器A類、奈良時代の軒丸瓦（型式不明）が2点（各々異範）、ガラス玉の鋳型が1点出土した。重複関係からSK11は後述のSK12より古い。

SK12は、南北1.2m、東西0.8m、深さ0.5mの土坑である。奈良時代の土師器・製塙土器が出土した。

SK13は、南北0.8m、東西1.2m、深さ0.4mの土坑である。奈良時代の土師器・須恵器、製塙土器が出土した。

出土遺物は、整理箱で上器5箱、瓦12箱の計17箱分ある。土器は、大半が奈良時代と平安時代前半の土師器・須恵器・黒色土器・製塙土器の小片である。破片を含めて、全体で4,365点（37.4kg）あり、そのうち製塙土器が1,884点（13.9kg）を占める。

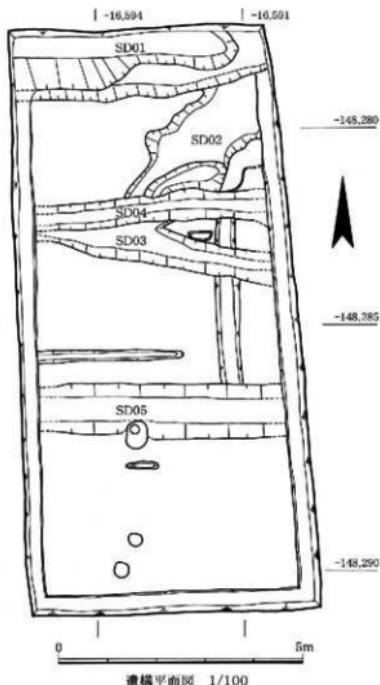
製塙土器は、SB01の柱穴やSD06のほか、発掘区全域で出土している。隣接する市DA第66次調査第1発掘区SK01にも、一括で廃棄されていることから、「賤院」推定地には、大量に塙を消費する施設があったものと思われる。　（宮崎正裕）



(5) 史跡大安寺旧境内（花園院推定地）の調査 第91次



発掘区全景（北から）



調査地は、大安寺の伽藍復原では、花園院にある。調査地の北辺には倉垣院と花園院を隔てる坪境小路が想定されている。今回は、花園院の北辺の様相を知るために調査を行った。

発掘区内の基本的な層序は、上から黒灰色土（耕土）、灰橙色砂質土（底土）、灰茶色砂質土、灰褐色粘質土と続き、地表下約0.5mで黄褐色粘土の地山に至る。地山の標高は、概ね63.0mである。遺構が存する面は、地山上面である。

検出した遺構は、8・9世紀の溝、14世紀の溝がある。以下で概略を述べる。

SD01は、長さ約5.5m分を検出した。溝の北岸が発掘区外北へつづくため、幅員が不明であるが、幅1.4m分を検出した。深さは約0.4mである。埋土から8・9世紀の土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器、丸瓦、平瓦が出土した。重複関係から後述のSD02よりも古い。遺存地割りからみると、倉垣院と花園院の間の坪境小路南側溝の可能性が高い。

SD02は、長さ約3m分を検出した。幅約1.4mで、深さは約0.1mである。埋土から8・9世紀の土師器、須恵器、白磁、平瓦が出土した。重複関係からSD01よりも新しく、後述のSD04よりも古い。

SD03は、長さ約6m分を検出した。幅約0.4mで、深さは約0.1mである。埋土から8・9世紀の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土した。重複関係から後述のSD04よりも古い。

SD04は、長さ約6m分を検出した。幅約0.5mで、深さは約0.3mである。埋土から8世紀の土師器、須恵器などが出土地した。溝底は西から東に向かう下り勾配である。重複関係からSD02、SD03よりも新しい。SD01を南側溝とすると、花園院の北辺を区画する築地の雨落溝の可能性がある。

SD05は、長さ約6m分を検出した。幅約0.6m、深さ約0.2mである。埋土から8・9世紀の土師器、須恵器、土馬、丸瓦、平瓦、14世紀の土師器が出土した。

今回の調査では、花園院の北辺の様相が明らかとなかった。
(山前智敬)

2. 元興寺旧境内の調査 第52次～第54次

平成12年度は、元興寺旧境内では、第52次～第54次の計3件の調査を実施した。個人住宅建設に伴うわずかな面積の発掘調査が多く、これまでの所見を裏付けるような調査が多かった。

また、中近世の奈良町遺跡の遺構が多く、奈良時代の元興寺に関わる遺構はわずかしか残っていない

なかった。第53次調査で、平成11年度の第51次調査地より続く掘立柱建物を検出したのみである。さらに、同調査では、元興寺を創建する際に削平されたと思われる古墳の周濠を検出した。これもまた、第51次調査地より続く遺構である。

平成12年度 元興寺旧境内発掘調査一覧表

調査名	調査次数	発出者	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
元興寺旧境内・奈良町遺跡	GG52	個人	個人住宅建設	島戸町12-4	平成12. 6.20 ~ 6.26	10m ²	武田和哉
島戸古墳・元興寺旧境内・奈良町遺跡	GG53	個人	個人住宅建設	島戸町6-2、-3、-4、-5	平成12. 8.24 ~ 9. 1	30m ²	安井宣也
元興寺旧境内・奈良町遺跡	GG54	個人	個人住宅建設	芝新宿町10	平成12.11. 6 ~ 11.22	43m ²	武田和哉



元興寺旧境内の調査 発掘区位置図 1/5,000

(1) 脇戸古墳・元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査 第52次・第53次

両調査地は、元興寺旧境内の伽藍復原では、西僧房にあたり、第52次調査地は西北行大房の中央西寄りに、第53次調査地はその南約20mの所で西南行小字房の中央西寄りにそれぞれ位置する。西僧房の推定地で過去に実施した調査では、中・近世の奈良町に関連する遺構が数多く検出されており、この時期に大幅な土地変更を受けたことがうかがえる。ただし、奈良時代とそれよりも遅る古墳時代の遺構も一部で残っており、南接する第51次調査地（平成11年度）では、奈良時代の西北行大房の基壇とみられる版築状の土層とそれより古い掘立柱建物が、東接する第39次調査地（平成6年度）及び第51次調査地では、古墳時代後期の径約30mの円墳と推定される脇戸古墳の周濠部分がそれぞれ検出されている。

今回行った2件の調査は、いずれも西僧房に関連する遺構の検出を主な目的として実施した。第53次調査では、脇戸古墳の周濠部分も想定され、その確認にも重点をおいた。調査成果は以下の通りである。なお、遺構番号は第51次調査の追番とする。

第52次調査 層序は、造成土の下に多量の上器や瓦の破片を含む暗褐色土の堆積があり、地表下約1.1mで暗灰色粘質土の地山に至るが、遺構が存する面は不明である。地山上面の標高は、最も高いところで約87.3mである。

検出した遺構は、設定した発掘区よりも大きな土坑SK28である。全容は不明であるが、発掘区の北東隅部分と西辺部分で、わずかに縁辺を確認した。東西3m以上、南北1.2m以上である。深さは、約0.7mである。

出土遺物は、遺物整理箱2箱分である。大半の遺物は、土坑SK28の埋土から出土したもので、奈良時代～近世頃までの瓦の破片や中・近世の陶磁器の破片が占めている。

第53次調査 層序は、宅地の整地土（厚さ0.1m）の下に中・近世の整地上（厚さ0.6m）が2～3層あり、その下が段丘堆積層である黄橙色シルトの地山である。古墳・奈良時代の遺構が存する

面は、地山上面で、その標高は87.7mである。

主な検出遺構は、脇戸古墳（SX01）の周濠部分、第51次調査地で検出された奈良時代の掘立柱建物SB04の北西部分、江戸時代の井戸3基（SE29～31）・土坑4基（SK32～35）である。なお、奈良時代の西僧房の基壇に関連する遺構はみられなかった。以下、検出遺構の概要を記す。

脇戸古墳（SX01） 発掘区南東部で周濠部分を検出した。深さは0.7mで、埋土は1～2cmの大い地山ブロックを含む暗褐灰色シルトである。底面付近から多量の埴輪片が出土した。

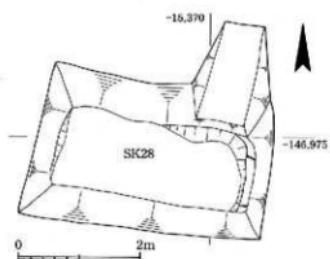
SB04 建物北西隅の柱穴1間分ずつを検出し、桁行1間（2.9m）以上、梁間5間（10.5m）の南北棟であることがわかった。各柱穴に径0.2mの柱跡がみられる。

SE29～31 SE29・30は、ともに発掘区東壁沿いで検出した平面円形の井戸である。前者は径1.5mの掘形で、整地土上面から1mまで、後者は径1.8mの掘形で、整地土上面から1.5mまでそれぞれ削り下げた。SE31は、径0.5mの平面円形の石組井戸で、石組上面の検出にとどめた。いずれも埋土中から17・18世紀の土器と瓦が出土した。

SK32～35 いずれもごみ捨て穴とみられる土坑である。SK32は、重複関係からSK33よりも古い。いずれも埋土中から18・19世紀の土器と瓦が出土した。

出土遺物は、遺物整理箱8箱分である。1箱は、脇戸古墳の周濠部分から出土した埴輪で、ほとんどが円筒埴輪である。残りは、江戸時代の井戸や土坑から出土した土器・瓦が大半を占め、キセル先等の金属製品もわずかにみられる。土器には、土師器・瓦質土器・国産陶磁器（肥前系、信楽、瀬戸等）がある。町屋であったことを反映して全体に日常雑器類が多く、土師器の皿、肥前系窯の椀、信楽窯の摺鉢は、大半の井戸・土坑から出土している。また、瓦は、丸瓦・平瓦が多く、他に軒瓦や土管なども出土している。軒瓦は5点で、すべて巴紋軒丸瓦である。

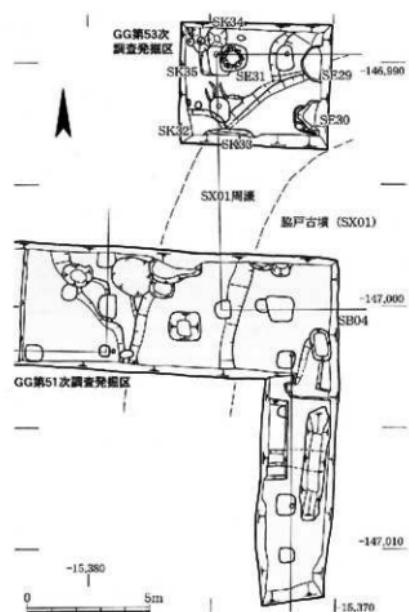
（安井宣也・武田和哉）



第52次調査 造構平面図 1/80



第52次調査 発掘区全景（北から）



第53次調査 造構平面図 1/200



第53次調査 発掘区全景（北から）



第53次調査 SX01周辺 墓輪出土状態（北東から）

(2) 元興寺旧境内（東塔院）・奈良町遺跡の調査 第54次

調査地は、元興寺の伽藍復原では、東塔院に該当し、五重塔跡基壇の西約30mに位置している。

今回は、塔周辺地の遺構の様相を把握するため東西2箇所の発掘区を設けて調査を実施した。

基本層序 両発掘区とも造成土の下に瓦や土器の破片を含む暗褐色土が堆積しており、地表下約1.0~1.1mで橙灰色粘質土の地山に至る。地上面の標高は、約88.4mである。

検出遺構 西発掘区では、近世の土坑・井戸を検出し、東発掘区では、近世の土坑等を検出した。

西発掘区 東辺部分は、後世に土管（掘削内に石敷がある）が敷設され、遺構が若干壊されていた。SK01は、発掘区のほぼ中央で検出した土坑である。掘形は、平面長方形を呈し、東西2.3m、南北1.5m以上、深さ約0.3mである。SK02は、発掘区の中央北寄りで検出した土坑である。掘形

は、平面長方形を呈し、東西約2.1m、南北1.5m以上、深さ約0.2mである。遺構の重複関係からSK01より新しい。SE03は、発掘区南西隅にある石組井戸で、一部を検出した。掘形は円形で、井戸枠の直径は1m程度と推定される。遺構の重複関係から、SK01よりも新しい。このほかにいくつかの土坑を検出したが、発掘区が狭いなどの諸々の事情から、明確な規模や時期は不明である。

東発掘区 SK04は、発掘区の東半で検出した平面不整形の土坑である。東西2.2m以上、南北4.4m以上、深さは約0.3mである。底には河原石を使った石敷が一部残っていた。このほかに、南北で時期不明の柱穴を3つ検出している。

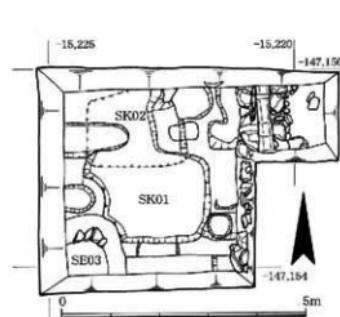
出土遺物は、整理箱約8箱分ある。その大半を奈良時代・中世・近世の瓦片と中世・近世の陶磁器片が占めている。
(武田和哉)



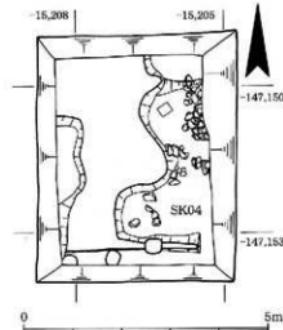
西発掘区全景（南から）



東発掘区全景（西から）



西発掘区遺構平面図 1/100



東発掘区遺構平面図 1/100

III その他の調査

1. 水間遺跡の調査 第1・2・3次

調査次数	届出者	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
MM1	奈良県北部農林振興事務所長	農業整備事業 (田原東地区)	水間町107、112、118、ほか	平成12.2.21～3.24	1,265m ²	篠方正樹・大庭洋司
MM2			水間町489、ほか	平成12.7.24～9.5	790m ²	
MM3			水間町119、ほか	平成12.10.30～13.2.15	2,700m ²	



発掘区位置図 1/6,000



調査地全景 (北から)

I はじめに

奈良市内で計画されている県営は場整備事業のうち、田原東地区内の遺跡調査を奈良県教育委員会から委託されることになった。田原東地区は水間町、別所町、曙光町、袖川町にまたがり、57haの水田が事業対象地である。初年度事業が水間町内で実施される予定となつたが、対象地の一部が遺物散布地に該当していた。そこで再度の確認踏査を行い、広範囲に遺物の散布が認められたので試掘調査(第1～37発掘区)を実施した(第1・2次調査)。その結果、ほぼ全域から遺跡の存在を推定させるような遺構、遺物が出土し、工事による遺跡の削平が及ぶ箇所については、発掘調査が必要となつた。そこで、関係機関との協議を行ない、6地点(△～G発掘区)において事前の発掘調査を実施した(第3次調査)。なお、遺構番号については、発掘区ごとに付した。

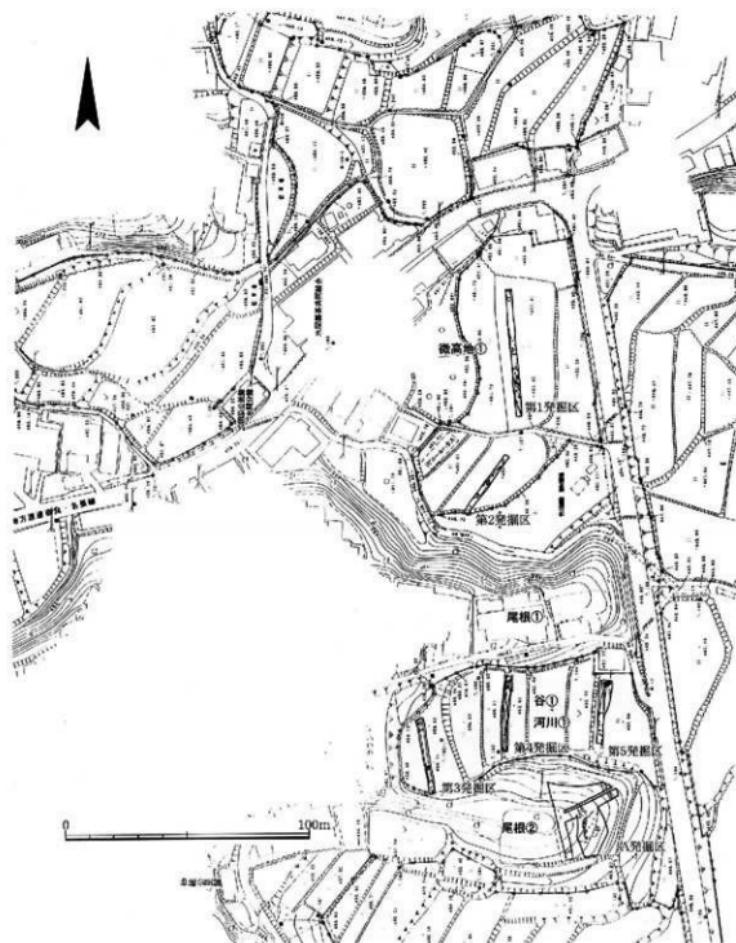
II 第1・2次(試掘)調査の概要

水間町の集落がある谷筋を東西に分断するように、国道369号線が走っている。集落は谷筋に突

き出る幾つかの低い尾根上に占地し、谷間の大半が水田となっている。今回の試掘調査範囲は、国道369号線より西側の5.1haを対象とした。37箇所で試掘調査を実施したが、それぞれの概要については一覧表(106頁)にまとめたので参照されたい。ここでは、試掘調査の成果について概略的に述べておく。

調査地には、西側の山並から東へ延びる5つの尾根があり、これを北から尾根①～⑤と呼ぶ。同様に、これらの尾根に挟まれた谷を北から谷①～④と呼ぶ。

尾根①の北側には微高地①が広がり、縄文時代の遺物包含層や遺構の存在を確認した。第2発掘区では縄文時代の船元式土器が出土し、堅穴住跡の可能性がある円形の溝などを検出している。谷①では12世紀頃の集石遺構(第3発掘区SX01・第5発掘区SX01)と7世紀の土器や下駄が出土した河川①、また尾根②北東裾で12世紀以前の掘立柱列(第5発掘区)が確認された。谷②では枝分かれした河川②に挟まれる微高地②上で12～13世



発掘区位置図（北部） 1/2,000



采掘区位置図（南部） 1/2,000

水間遺跡の調査 第1・2・3次

第1・2次調査 発掘区一覧表

発掘区名	規模(㎡)	概要
第1発掘区	52.1×2.5	最高地上に绳文時代包含層が堆積し、土坑、溝(12世紀)を検出
第2発掘区	28.3×2.3	土坑、溝(縄文時代中期)を検出
第3発掘区	31.1×2.5	無石遺構SX01(12世紀)を検出
第4発掘区	30.3×2.0	土坑(12世紀以前)を検出
第5発掘区	25.5×2.5	北東で河川(4~12世紀)、東右遺構SX01(12世紀)、西半丘陵部で柱穴を検出
第6発掘区	33.2×2.5	西面、北東で河川(11~13世紀の土器を含む)、中央最高地上土坑(12世紀)を検出
第7発掘区	48.7×2.5	西面、北東で河川(11~13世紀の土器を含む)、中央最高地上土坑(12世紀)を検出
第8発掘区	20.2×2.9	西面で無立柱建物AB01を、北東で河川(6~12世紀の土器を含む)を検出
第9発掘区	29.8×2.1	西面で河川(4~7世紀の土器を含む)を、北端で小穴を検出
第10発掘区	38.4×2.2	大半が河川内(4~12世紀の土器を含む)
第11発掘区	11.8×4.0	北東で河川(4~13世紀の土器を含む)を検出
第12発掘区	17.3×2.3	南へ下る谷底斜面と遺物充填層(11~13世紀)を検出
第13発掘区	35.8×2.0	低地に遺物充填層(11世紀) 堆積
第14発掘区	39.5×2.0	西と中央で河川(4~12世紀の土器を含む)を検出
第15発掘区	24.2×2.3	土
第16発掘区	40.7×2.0	南西で河川(4~7世紀の土器を含む)を検出
第17発掘区	49.7×2.5	西で河川(堆生、布留式土器を含む)を検出
第18発掘区	25.2×2.4	遺構なし
第19発掘区	8.8×2.2	南で大きな落ち込み(12世紀)を検出
第20発掘区	18.8×3.0	北で河川(堆生、布留式土器を含む)を検出
第21発掘区	21.8×3.0	土坑、小穴(中世?)を検出
第22発掘区	10.5×2.0	土坑(12世紀)の一部を検出
第23発掘区	21.0×2.7	中央で南北方向の高まり(11~12世紀)を検出
第24発掘区	11.8×2.0	南東へ下る谷底斜面を検出
第25発掘区	13.3×2.0	南東へ下る谷底斜面を検出
第26発掘区	11.2×2.3	低地に遺物充填層(11世紀) 堆積
第27発掘区	24.2×2.6	土坑、溝(馬牛時代後期)を検出
第28発掘区	27.4×2.5	遺構なし
第29発掘区	8.8×2.2	遺構なし
第30発掘区	7.0×2.2	河川内(布留式土器を含む)
第31発掘区	5.5×2.5	遺構なし
第32発掘区	14.3×2.5	西半が河川内(堆生、布留式土器を含む)
第33発掘区	30.7×2.5	西半が河川内(堆生、布留式土器を含む)
第34発掘区	7.0×2.6	低地に遺存層(12世紀) 堆積
第35発掘区	6.0×2.5	遺構なし
第36発掘区	10.7×2.6	土坑、小穴(12世紀)を検出
第37発掘区	25.0×2.5	西面で河川、北西で壁土、土坑(12世紀)を検出



第27発掘区 全景 (北東から)



第5発掘区 全景 (北北東から)



第1発掘区 全景 (南から)



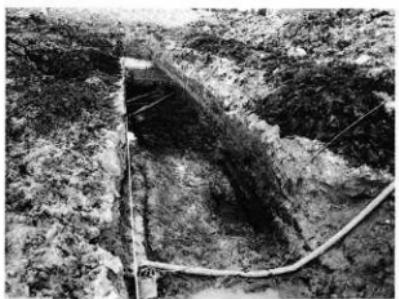
第2発掘区 全景 (北東から)



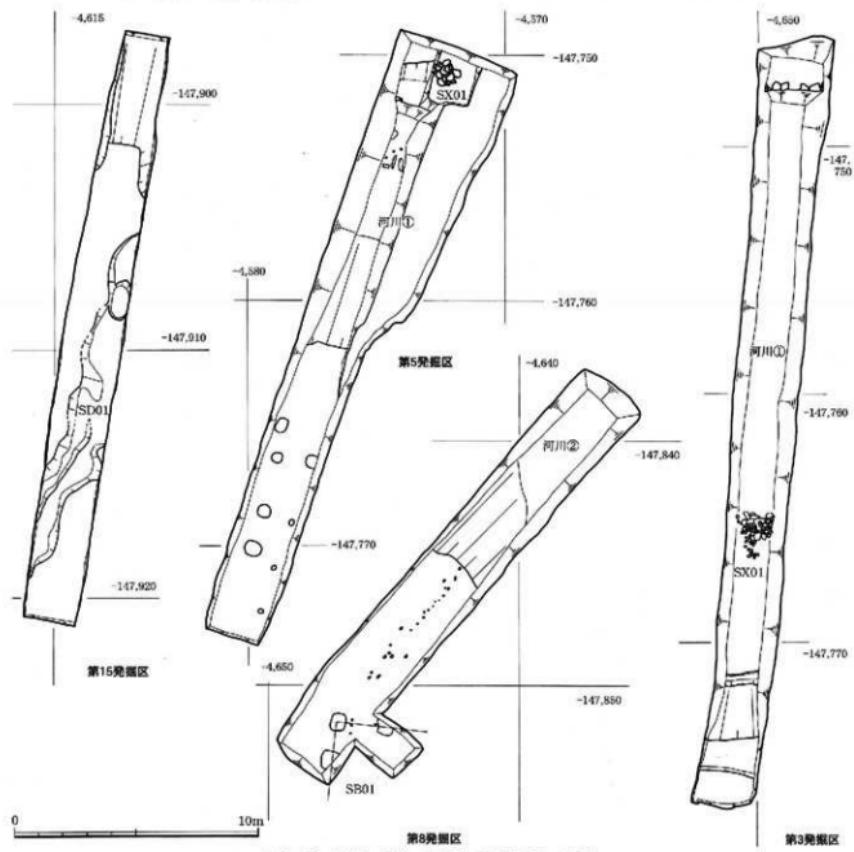
第3発掘区 全景 (南から)



第11発掘区 全景(北から)



第10発掘区 全景(南から)



第1・2次(試掘)調査 発掘区 遺構平面図 1/200